

## 特別合同シンポジウム:「今再び平和と宗教と公共を問う」2016年10月16日 上智大学

○千葉眞（司会・国際基督教大学教授） それでは、最初の講演の方に移らせていただきたいと思います。

小林正弥さんの方から「神社と政治--今再び平和の公共を問う」というタイトルでお願い致します。それから、栗田禎子さんの方から「中東情勢と日本・世界のゆくえ」を続けて講演をお願い致します。

### 講演①「神社と政治——今再び平和と公共を問う」 千葉大学教授(公共哲学)小林正弥

9月に『神社と政治』というタイトルの本を角川新書から出版を致しましたので、その要点をお話しさせていただきます。

以前は、こういう本を書くということは夢にも考えていなかったのですが、今年の初詣のときに一部の神社が改憲署名のブースを出しているということがメディアで話題になりまして、私も取材を受けてコメントをし、文章を書きました。そういうことがきっかけになりまして、出版社の方から、このテーマについて本を書いてほしいという依頼を受けたというのが、この本ができた成り立ちです。

そうはいつでも、私は鎌田先生のように神社や神道の専門家ではございませんので、どうしようかなと考えたのですが、単に政治や改憲問題との関係だけで議論するのではなく、もっと広い公共性の観点から神社をめぐるさまざまな問題について包括的に議論することでしたら書けると思って執筆をお引き受けしました。

その後、安倍政権との関係で日本会議について批判的な本が増え、ベストセラーになったりもしてきて、非常に重要なテーマに浮上しつつあります。

その中で、より公正にさまざまな立場を紹介するというスラングでこの本を執筆しました。また私は、専門家ではないので、いろんな方々のインタビューなどをしながら本を作ることにしました。ハーバード白熱教室以来、対話を強調しているのですが、この本も対話的なアプローチによってつくられた本です。特に地球平和公共ネットワーク以来、鎌田先生と知り合っていますので、まずは鎌田先生にインタビューをして、さらにいろいろな方々と対話しながらつくっていかうと考えたわけです。

この本の最後には、特別対談というかたちでインタビューや対談のエッセンスを紹介しています。それは短いスペースなので、そこに収録できなかった内容を、かなり本文の方でも説明しています。

改憲署名運動を一番積極的に行った東京都神社庁の庁長の方にもインタビューすることができましたし、あるいは研究者にして秩父神社の宮司であるという藺田稔先生にインタビューをし、シンポジウムなどを通じて知り合った千勝神社の千勝宮司のインタビューを行いました。そして、國學院の研究者にもインタビューしたいと思ひまして、若手で非常

に優れた業績を出していらっしゃる藤本頼生先生のインタビューも入れています。

その中には、神社本庁に関わりのある方もおられます。他面で、鎌田先生は反神社本庁の立場と言われていらっしゃいます。神社、あるいはそれに関係する人たちには、世の中から見ると、安倍政権を支持して改憲に突き進む運動を支援しているというイメージが強いわけですが、それだけではない多様な考え方が神道の中に存在するというのを、この本を通じて明らかにしました。

このように政治問題を一つの軸にしていますが、もっと広い観点から考えて宗教性の問題も重視しています。

「スピリチュアリティと平和」というテーマでシンポジウムを行ったり、本をつくったりしたこともあるのですが、最近、スピリチュアリティについて注目されています。パワースポット巡りとして神社にお参りする方もいらっしゃるということですが、神社の人たちの考え方との関係はどうなんだろうか。こういったことも論じています。

それから、地方消滅が話題になって、人口減によって地方のコミュニティ、あるいは自治体が消滅するということが問題になっていますが、当然、その地方の神社・仏閣も厳しくなるわけです。そういう問題について神社の方々はどう考えていらっしゃるのかが、二つ目の問題です。

三つ目が政治的な問題です。ある自民党の議員が北海道の補選に行って、巫女さんを連れだそうとしたところ、「自民党なんか嫌いだ」と言われて、「巫女さんのくせになんだ」と言ったということがメディアで話題になりました。先ほど言ったような全体の状況があるので、神主さんや巫女さんは当然自民党側だと思っていたわけです。こういった政治との関係をどう考えるべきなのか。

第4点は、いまグローバルゼーションと言われていますが、国際化の中で外国人と神社の関係、あるいは神道との関係はどうなんだろうか。

こういった事柄を問いとして冒頭に掲げ、これに対して答えを考えていったわけです。

改憲運動に関しては、第1章に、本のきっかけになった文章を手直しして収録致しました。「神社が改憲運動をしてよいのか」という問いを考えました。

こういうことを神社が行うのは政教分離に反しているという批判もあったのです。「政教分離とはそもそもどういうものか」という論点に関わってくるので、千葉先生はじめ専門家の議論を参照しながら考えてみるに、政教分離のもともとの在り方や意味というのは、「特定の宗教団体と国家が分離をする。そして、双方が非干渉で自律的である」ということです。

従って、「政治に宗教団体に関わってはいけない」とか、あるいは「政治活動をしてはいけない」という意味ではないし、日本やアメリカにおいても、そういうものとして政教分離は考えるべきであるということです。宗教団体が政治活動をしてはいけないという意味ではないので、「神社の改憲運動自体が政教分離に反しており、違憲である」とは言えないわけです。

逆に、「宗教が公共的な発言をする、活動をする」というのは、私は非常に重要なことだと考えております。なぜならば、政治経済というのは利害関係から議論がなされていることが多いわけですが、それを超えて理念から政治経済について考えるという視座を提供する意義を持つからです。

例えば、「安保法」で、キリスト教や仏教の団体が、それぞれの宗教の観点から反対声明を行ったというのも、そういう観点から貴重なことだと考えているわけです。こんにち、神社も民間の宗教団体になっているわけですから、民間の宗教団体としての観点から政治的な発言を行うということは、その内容に一人一人が賛成するか反対するかとは別に、やはり尊重されるべきことだと思います。

ただ、そうであるからこそ、宗教的な論理や考え方と、その政治的な発言の関係を明確にする必要があるだろうと思います。ところが、神道の政治運動は、例えば、「国柄」というような言葉をよく使っていて、世俗的なナショナリズムのような主張をしていることが多いんです。

しかし、宗教的な観点からの議論であれば、通常世俗的なナショナリズムとは違う論理が明確にされるべきではないかと思えます。そこについて公共的責任があるのではないかということをも主張致しました。

となると、「神社とはどういうものなのか」がポイントになってきます。日本人は多くの人がお参りに行ったりしているので、神社や神道について一定のイメージは持っているけれども、「神道とはどんなものなのか」をあらためて確認した上で政治の議論をしていくことが必要になります。そこで鎌田先生をはじめ、宗教学者、神道の専門家の本を参照しながら公共哲学の観点からまとめて書きました。

神道は宗教なのかどうなのか。ここからして大きな議論があります。皆さんのお手元に、今日の私のスライドと図をお渡ししたと思いますが、この図の中で、例えば、第2図で上と下に分けていて、「宗教として考えている人、あるいは実際に宗教に関わっている人」と、そうではなく習俗や習慣と思っている人と、その両方を示してあるわけです。

実際には、今日では神道を習慣のように見ている人が相当多いだろうと思います。実際に調査をしてもそうなのですが、そういう人から見ると、政治的な活動を行っているところに違和感が生じるのも当然かなと思うわけです。

そこで、政治活動における宗教的な論理を考える上で、神道のエッセンスを確認して見る必要があるとして、本の初めの方では、そういったことをなるべく分かりやすく説明を試みました。

その中で公共哲学と関連することを少しだけ申し上げておきますと、公共哲学の思想においては、キリスト教やヨーロッパの世界観と対比し、創造という考え方がキリスト教のような西洋の発想には強いものに対して、神道をはじめとする東洋の思想では、生成といった発想が強くて、自然の世界との親和性や調和性がある。

生成するという考えは、いつまでも一つの立場に止まっているわけではなくて、さまざま

まな展開があるということの意味しています。そこで神道の歴史を振り返り、私なりに6段階に分けて説明を致しました。

政治との関係を考えるときに、「神道とか神社はこういうものだ」という前提で議論が進んでいくことが多いわけですが、実際は、そのイメージが明治時代以来にできた国家神道といわれるような神道に基づいていることが多い。それをさらにたどってみると、古代の国家ができた段階で、大和朝廷が神道を国家の宗教としてつくり、『古事記』や『日本書紀』を編さんして、神祇官などの官制をつくった。そういう時代の神道のイメージが非常に強いわけです。

ただ、より深く考えてみると、もっと原始的な時代の神道、アニミズムやシャーマニズムが非常に色濃くあった神道もあるわけですし、古代の後、中世の時代になってくると武家の時代になりますから、必ずしも古代の国家のような神道ではなくなります。

天皇を中心にして、神道はあるけれども、それは権威の担い手であって、それとは別に権力は武家が持っているようになりました。権力と権威が分化したのです。そういった時代の神道の中には、非常に神秘的な要素を強調する思想も現れてきました。

また、江戸期のように、吉田家という家が神道を幕府に委託されるようなかたちで非常に大きな力を持つ。そういった時代もありました。そして、戦前は国家神道ですが、戦後になると国家と分離されるというかたちになっているわけです。

ですから、それぞれの時代の特色があり、その思想や教えの中身、政治との関係も非常に大きな差があるわけです。そのように考えてみると、時代の変遷とともに神社や神道にはさまざまな多様なかたちがあり、そういうものを前提にして政治との関係も考えていく必要があるのではないかと思います。

「古代の国家神道を近代において復興させようとした」と戦前の国家神道を見ることができると思いますが、当初は国教にしようという考え方があったわけです。しかし、当時の明治時代ですら、ヨーロッパとの関係とか、国内の仏教徒との関係に配慮せざるを得なくて国教化はできなかった。

だから、戦前の国家神道というのは、国教そのものではなく、公的な国家の祭祀であるとされていたのです。そういう意味で「道徳であって宗教ではない」というかたちだったのです。行政的に見ると宗教ではないわけだから、「宗教の教えを説くべきではない」という考え方が強くなって、宗教的な考え方そのものは、強調できなくなったのです。

そこで今でも、神社を考えるにあたっては宗教性を必ずしも強調しない場合が多いのです。お祭りを強調するという考え方や、多くの人々が神社や神道を、習慣のように考えているのは、そういった時代の影響もなおかつ残っていると思えるのです。だから、神社が政治運動をするというときに、宗教的な考え方が明確に出ないというのは、戦前以来のそういう性格が現れているのではなからうかと思うわけです。

私が公共哲学で主張しているコミュニタリアリズムという思想では、それぞれの思想を内在的に理解をして議論することを重視しています。例えば、神社や神道を外から批判す

るというだけではなく、その思想の中身から考えていく。

そのときに、いまはこういう考え方が主流だと思われていても、同じ伝統的な思想から、別の考え方も解釈として成り立つし、主張もあり得る。ここを重視しています。ですから、ユダヤ教の伝統の中でも、ユダヤ教の伝統から、ある考え方だけが出てくるのではなくて、別の考え方も現れうる。同じことが神道にも言えるだろうと考えるわけです。

そういう目で見ていると、神道や神社の考え方の中からも、いま主流だと思われている考え方以外の多様な可能性がある。例えば、有名なところでは、エコロジーという言葉をつくった南方熊楠という民俗学者は当時の神社界の主流の考え方に反対しました。後に神社本庁設立に大きな役割を果たした葦津珍彦という人も、戦前は東条英機の体制に反対したわけです。

もう一つのポイントとして、公共哲学では、公共とは何かということを中心に考えていくので、公と私の関係に注目をしています。公共というのは、公と私を媒介するものと考えることができる。たとえば国家ではない民間の私的な立場から、ボランティア活動とかNPOやNGOとして公共的な活動を行う。そこで行われる活動の中身というのは国家とも関係をする。つまり、それが政策になった場合には公的なものになっていくわけですし、公的な行政との関係、政策との関係も出てきます。その意味で、民間の立場、私的な立場なんだけれども公共的な意味を持っていて、それは国家などとも関係をする。

そういう目で見ていると、神社本庁というのは、戦後、GHQによって国家神道が解体をされて、やむを得ず民間の宗教団体となったわけです。ただ、公共性は大事だという気持ちがあって、それをなんとか回復しようとした。そこに一種のパラドックスがあって、民間になっているんだけども公共的な活動をする団体になりたいと考えた。

その意味では、「民の公共」という立場に好き嫌いを問わず置かれている。公共性を回復しようとした結果、「民の公共」という性格を持つようになったという面があると思います。ただ、公、つまり国家との関係を回復したいという気持ちが政治運動につながったわけです。

もう一つのポイントとしては、コミュニティを私たちの考え方では強調しますが、コミュニティは国家だけではなくて、ローカルなコミュニティ、国家を超えたグローバルなコミュニティを考えています。

そういう観点から見ると、神道、あるいは神社の歴史の中で、地域とか家族のコミュニティに関わる性格が強い。他面で、国家を超えるコミュニティに注目した流れもあります。

実際に戦後の段階で、例えば、代表的な民俗学者である折口信夫とか柳田國男という人たちはこういった方向を重視しました。折口は、国家を超えた人類教が、天皇制と切り離された後の神道の行くべき方向だと主張しましたし、柳田は、日本固有の民俗的な宗教として、ローカルな民俗的な信仰を重視しました。このようにさまざまな層に対する着目はあったわけです。

しかし、神社本庁においては国家との関係に重点を置く考え方が強かったのです。コミュニティという観点から見れば、国民と国家は違うわけですが、このような区別はあまり明確でなく、国家の方に重点を置いているのです。

そこで、それぞれの層について考えてみようとして、まずはローカル、家族の信仰から議論を始めました。実は、千葉大学のプロジェクトで編集している『公共研究』という雑誌に、「祖霊信仰は公共哲学だ」という趣旨の論文が投稿されて、私がそれに対して応答しました。初めはこのような投稿がなされたことに驚いたのですがなかなか面白い議論だなと思いました。

公共哲学というのは、難しい哲学ではなくて、人々が理解し、行動や政策の指針とするような哲学、考え方です。そう考えてみると、確かに祖霊信仰のようなものも公共哲学であるという主張が出てきてもおかしくないと思って、それに対して私がリプライを行ったのです。

そういった議論も紹介しつつ、祖霊信仰から考察を進めました。

伝統的には、共同体や家族が一つの考え方に基づいていることが多かったということは否定できないけれども、「より多様な、公共的な考え方に開いていく」という観点で祖霊信仰の問題を考え直して、宗教性をもう一度活性化する可能性があるのではないか。

次はローカルなコミュニティです。ここはとても重要なポイントで、先ほど言った地方消滅というのは、まさにローカルなコミュニティの衰退の問題です。もともとの神社や仏閣はコミュニティの中の精神的拠点という役割を持っていたし、キリスト教の教会もそういう意味を持っていたといわれるわけですが、今ではそういった機能が非常に衰退をしています。

人口が減りつつある中で、ローカルな精神的拠点として神社をよみがえらせることができるかどうかというのが神社衰退の問題に関しての大きな鍵になる。そこで、インタビューや対談をした先生方に、そういう可能性があるのかどうかということ聞いて、その結果を書きました。答えには、かなりの共通性がありました。

その中で、例えば、「人生のよろず相談所のようなかたちで神社を発展させる可能性がある」という議論や、衰退している地域においては、都会に出て行った人たちに、お祭りのときに戻ってきてもらって協力してもらおうとか、外部の人とのネットワークによって神社のお祭りを維持するとか、そういう可能性があるのではないかという意見や動きが紹介されました。私もそういうかたちで、その難問というものを突破する可能性に期待して、そういうことを紹介したわけです。

実際、コミュニティの神道という考え方は、コミュニティの共同の問題、公共の問題と非常に関係するわけです。ですから、そういったコミュニティにおける公共的な問題に関心を持って、それに対して対応するやり方を考えるということが一つの鍵になるのではないかと思ったわけです。

福祉についても、他の宗教において福祉の活動は相当見られることですが、神社におい

でもないわけではない。それを説明しながら、

それをもっと活性化していく可能性があるのではないかという考え方も紹介しました。

さて、この本の後半では政治問題そのものについて焦点を当てているわけですが、政治との関係においては、神社本庁の考え方が非常に重要になってくるので、それを簡単にまとめました。

神社といっても、神社本庁の傘下にある神社だけが全てではなく、それとは独立の神社もありますし、別のグループもあります。それから、伝統的な神社ではなくて、新しい新宗教系の神社もあります。ただ政治との関係の問題になると神社本庁が政治運動をしているので、そこに焦点を当てたわけです。

先ほど述べた葦津という人が戦後に神社本庁をつくる時に大きな影響を与えました。当時は神社にも一つの宗教のように教義をつくるという意見もあったわけですが、実際には、さまざまな神社が、それぞれの由来を持っていて、考え方にも多様性があるので、それを尊重する結集体としてスタートしました。そのときに中心を伊勢神宮に置いたということです。ですから、それを中心としながら多様性を尊重するかたちで結成されました。

しかし、思想的な部分として、戦後の神社は、民間の宗教団体、宗教法人ということになりましたので、「宗教としての考え方や性格は何なのか」ということが問われるようになってくる。教義のような共通する考え方を明確にできるかどうかという議論があるわけです。結果的には、統一的な教義はつくらないことになったのです。

その中で標準的なものとして定着をしてきたのが「敬神生活の綱領」というもので、神道的な「善い生き方」に相当するものだと思います。ここに正統的な考え方を見ることができます。

鎌田先生にインタビューして驚いたのですが、その恩師の一人が小野祖教という方で、この人が戦後に、國學院から教職追放の対象となり、神社本庁に移って、そこで原案をつくられてまとめられた。その後、また國學院に戻られたわけです。

しかし、統一的な教義の作成はできないけれども、標準的な解釈をつくらうとして、小野先生たちは努力されたのです。しかし結局はできていません。その代わり、神社本庁憲章というものができて、そこでは「尊皇」という言葉が入ってきています。「敬神生活の綱領」には入れられていないので、天皇崇拜という要素がその後に強くなってきたということです。

こういった流れを概観してみると、一方で神社にはいろいろ多様性がある。しかし、その中に共通の宗教性を求めようとする。この間のジレンマがあります。

もう一つは、そういう共通の宗教性を強化していこうという流れがある一方で、あまり宗教性が強くなると、今度は国家との関係を再び作ることが難しくなる。政教分離の原則があるので、国家との関係を再びつくるためには、あまり明確な宗教性がない方がいい。こういうジレンマもあって、結果として、いまのようなかたちになっている。

そういう中で、神道政治連盟が政治との関係を強化するためにでき、政治運動をしてき

たわけです。その中には、先ほど言いましたように、古代国家や明治国家における神道の在り方を、なんらかのかたちで回復しようという動きも、やはり強いと思われるわけです。

例えば、祭り主としての天皇の在り方を明確にするために、「明治憲法」の解釈でいえば、天皇の統治大権と祭祀大権を復活させることを理想と考えているわけです。

通常政治は政治家に委任するのだけれども、天皇がその上において、神聖を保つ心を民に持たせる。そういう意味で天皇が統治大権と祭祀大権を持つべきだということです。こうなると、国民主権の現行「憲法」とは原理的に対立するわけです。

サイトなどでは「国柄」という言葉を使っていますが、内部の発行物では、「国柄、すなわち国体」ということも多いんですね。ですから、戦前のような国体の復権という願いを持って、いまでもそのための政治活動をしている人たちがいることは否めないのです。

日本会議を批判する本のブームが起きて注目されましたが、もともと「明治憲法」のような国体を復興させようという運動、あるいはそういう「憲法」を復元しようという運動は、神社本庁系だけではなくて、神道系の新宗教である「生長の家」にもあり、両方が、他の宗教団体とも協力して日本会議の源流を作ったのですね。

ところが、「生長の家」の方は、その後、3代目になって大きく路線を転換して、例えば、「安保法」にも反対をし、立憲主義が重要だという声明を出しています。ところが、その路線転換に賛成できない元信者たちが、日本会議の事務局やブレーンなどとして大きな役割を果たしている。こういうことを解明した著作が話題になっています。

ここから言えることは、例えば、「生長の家」のような運動においては、政治との関係において大きな路線転換が生じた。そういう意味で葛藤があった。ところが、神社本庁系の場合、そのような転換や葛藤がそれほど明確にはなっていないと思えるわけです。

従って、「明治憲法」や古代国家のようなイメージで、政治との関係を回復しようという方たちが今でもいらっしやって、それが日本会議批判などでスポットを浴びているんだと思います。

他面で、それが全てかという、必ずしもそうではないと思います。神社本庁ないし神道政治連盟系の人たちの中でも、さまざまな考え方のバリエーションがあるわけです。私の本に収めたインタビューではこの点も明らかにしました。

例えば、靖国問題とか大嘗祭などにおいても、同じような考え方の違いが神社神道の中にも存在します。戦前の国家神道を思わせる考え方もあれば、「民の公共」という観点からも興味深い議論や考え方も出ているわけです。

そういったものを一つずつ見ていくと、神社神道には「戦前回帰」を願う人たちがいる反面、一見似て非なる考え方を持っている人もいることがわかります。先ほど言ったように、神社本庁は戦後に、好むと好まざるにかかわらず民間の立場におかれたので、民間の立場から、一応は現行「憲法」を前提として、どうやって神道的な観点からの公共性を実現していこうかという、さまざまな試みをしてきました。

その試みの中からは、こんにち、例えば、「民の公共」とか「私的な公共」といったもの

になるような考え方も導けると私は考えました。本ではこの辺の考え方に、立ち入った説明をしています。

そういった可能性もしっかり見ていくと、神道を内在的に考えるときにも、二つの大きな路線、考え方があり得ると思います。一つは戦前の国家神道のモデルです。もちろん、こんにちの「憲法」と衝突してしまいますから、国家神道そのものはすぐには再現できないわけけれども、なんとかして、一定程度は復元していこうとするのが一つの考え方です。いまの神社界の政治運動にはこのような考え方が影響しているのではないかと思えます。ここが批判をされているポイントです。

これに対して、国家と区別された国民というコミュニティの立場から神道を考える可能性もあって、先ほど言ったいくつかの試みの中には、そういう「民の公共」としての神道を発展させていく可能性もある。だから、公共哲学の観点から見れば、こういう発想の神社神道が進展していくのが望ましいのではないかと思って、その可能性を、いままでのさまざまな試みの中に探ってみました。

さらに、こんにちの大きな政治的な論点の中で、例えば、原発問題のような環境問題、安保法のような平和問題、TPPのような経済問題などについても、神道関係者の方々がどう考えているかということがインタビューする中でわかってきました。例えば、鎌田先生のインタビューを見ると、神道の一番の中心になる考え方として、生態智が潜在教義としてあるのではないかということを言われています。

そういった観点からみれば、環境問題に関しては、自然を尊重するが故に、原発には反対あるいは慎重な姿勢になるわけです。平和については、「安保法」や武力行使といった流れに反対をして、「平和憲法」の精神を尊重する。

経済も、TPPを政府は通そうとしているわけですが、例えば、稲作は神道にとって非常に大きなシンボルで、日本の農業という観点から見れば、やはり反対を導きだし得ることになるわけです。

あるいは安倍談話が出されて、現在の天皇陛下とのスタンスの違いも話題になりました。本を書いた後で生前退位の問題についてのメッセージが出されましたので、そのことがさらにクリアになってきているわけです。

当然、いまの天皇陛下は「憲法」上の国事行為をされているわけですが、プライベートな、私的な祈りとしては神道的な祭祀を行っていらっしゃると思いますので、あのメッセージの中にも「祈り」という言葉があるわけです。

そういう天皇陛下のお考えも含めて、神道的な伝統の中からも、やはり「平和憲法」を尊重して、「先の大戦」を反省しながら新しい時代をつくっていこうという考え方もあるわけです。そういう自然や平和を尊重する考え方は、エコロジー的な平和主義と言うこともできるだろうと思います。

もちろん神道の中には、そうではない考え方をされる方もいて、私の本の中でも、宮司などの方々が、こういった問題について、どういう論理で原発再稼働や安保法を支持する

主張をされているかということを紹介してあります。

私とは違う考え方や主張であることが多いのですが、こういった論理を知ること自体は貴重だと思います。先ほど言ったように、一般の人が見ることができる公共的な発行物や文献においては、神道の宗教や思想から、なぜ、例えば、安倍内閣が言っているような政策に賛成するのかということが分からないわけです。しかし、これが分からないと、宗教的な観点からの賛否について公共的な議論ができない。

そこでまずは、「どういう理由でそういう主張をされているのかを伺いたい」というのがインタビューにおける私の大きな目的です。私のこのような問いに対して宮司や神道研究者が非常に明快に説明をしてくださいました。それを聞いて初めて、「こういう論理で、こういった論点について賛成だと言われている」ということが分かったのです。この点を紹介できたことには大きな意味があると思っています。

この本の中では、なるべく中立的で公正に多様な議論を紹介しようとしていますから、私の立場は、それほど強く出さないで書いたつもりです。そこでぜひ皆さまに自分自身でお読みいただいて、それぞれの観点から、さまざまな議論を知った上でご活用いただきたいと思います。

現行「憲法」を守りたい、あるいはいまの内閣の政治路線に反対だという方には、「何故に神社界の人たちがこういう主張をしているのか」ということが紹介されていますので、それをぜひご覧いただいて、「こういう考えはよくない」とか「危険だ」ということを、公共的にしっかりと主張していただきたいと思います。

逆に、神社や神道に共感をしていたり、その観点から現在の政治路線に賛成している方々にも、神道的な政治の考え方を発展させるために読んでいただければ嬉しいと思います。さまざまな論点が提示されていますし、神道の内部でも異なった考え方があることも示されています。さらに、上に述べた幾つかの試みを発展させるためのアイデアも述べたからです。

ですから、特定の立場を強調しないで書いたもので、いろんな方に読んでいただいて、それぞれが自分の観点から、神道や神社の問題を公共的な議論として考える際の素材としていただきたいと思っています。

さらに、市民宗教というのは、亡くなられたロバート・ベラーという非常に重要な宗教学者の議論です。これを紹介しながら、神道と政治の関係を考えるために、いくつかの考え方も紹介をしています。

さまざまな政治において、その根底に宗教的な次元がある――これがベラーの市民宗教の一番基本的なテーゼで、これは非常に貴重な考え方だと思っています。ただ、先ほど言ったように、特定宗教と国家が結合するということになると、政教分離に反しますし、非常に危険です。そこで、そうならないような方向で宗教的なスピリチュアリティの考え方が、政治ないし公共的な次元に善い方向で影響する可能性を、いままでの議論や試みからも切り開いていくことが大事なのではないかと思うのです。

例えば、葦津氏のような神社本庁に影響を与えた理論家、一般には右翼的な思想家といわれている人の考え方の中からも、このような可能性を紡ぎ出すこともできると思うのです。例えば、ルソーや中江兆民の一般意思という考え方をを用いて議論しているところがあります。それは、当然、ルソー自身の人民主権論における一般意思の用法とは違うけれども、接点はあるわけです。そういった議論も意識しながら公共的な議論を発展させていくことによって、神社ないし神道の観点からも民主政治の議論を発展させていく可能性があるのではないかと考えるのです。

あるいは葦津氏は、現行「憲法」を前提としながら戦略的に自分たちの願いを実現する方法も考えて主張しました。それに注目してさらに発展させることによって、「平和憲法」の精神を前提としながら、神社や神道の公共性を実現していく方法もあるのではないかと。こういうことも考えて、いくつかのアイデアも提示しました。

また、先ほど言った折口の戦後の主張だった人類教も、グローバルな時代においては、あらためてしっかりと振り返って発展させていくべき価値があるのではないかと考えます。

例えば、鎌田先生の場合、日本の神仏習合を復権させることを主張しておられます。そもそも神道そのものが神神習合だというのですね。伊勢系、出雲系というように、異なった流れが習合するという歴史がそもそも神道にはあるということですので、そういったものを踏まえながら、単に日本の内部だけではなくて、グローバルな観点の習合を発展させられないだろうか。

そういった考え方が、いまのグローバル化に対応するように、地球的なスピリチュアリティの基礎も形成する可能性があるのではないかと。こういうことも問題提起として述べました。

いろんなことを書いたので全部読み通すのはなかなか大変だという人もいらっしゃるのですが、皆さんがもし読んでくださる場合には、ご自身の一番関心のあるところだけでも読んで活用していただければいいと思うのです。そこで、まとめとしてどんなことを言っているのかを最後に申し上げておきたいと思います。

四つの問いを初めに申しましたが、それぞれについて、いろんなインタビューや考察の中から、それなりの解答や方向性が出てきたのではないかと思います。例えば、ローカルなコミュニティにおける神社神道の衰退に対しては、一般の人を広く受け入れる在り方と宗教性を深めていくという、この「二つの道」を両立させていくという答えもありました。政治については、現行「憲法」、あるいは近代「憲法」の精神を前提にしなが、公共的な神社神道を発展させていく可能性——国家ではなくて、逆に国民の神道として発展させていく可能性もあると思います。それは、ある意味では、公共的な宗教が発展していく道ではないかと思うわけです。

皆さんにお配りした第6図には、そういったことを集約してあります。これを見ると、祭政関係、すなわち宗教と政治の関係とか、あるいは政策の関係において、多様な考え方

が神道や神社の中にあるということが簡単にわかるのではないかと思います。

そういったものをご覧になって、「様々なバリエーションの中の、どこに自分の考え方が相当するのか」ということを考えながら、別の可能性も模索していくという可能性もあるのではないかと思います。

なるべく神道や神社を内在的に考えていこうとして書いた本ですので、公共哲学の言うような活私開公とか熟議という可能性を内在的に開くことを願っています。

そして、いま「憲法」改正が政治のテーマとして現実味を帯びていて、天皇生前退位問題のような神道との関わりの深いテーマが公共的な関心事になっているので、あらためてこういった問題をわれわれは真正面から公共的に考えて議論してみることが大事だろうと思います。

先ほど言ったように、現在の神道界、あるいは神社界の政治運動では、あまり宗教的な主張を言わない。しかし、突き詰めてみると、その奥には祭政一致のような極めて宗教的な考え方があるわけです。それにもかかわらず、それを知らないで政治的な動きが進んでしまうのは非常に危険なわけです。

だから、「どういう宗教的な考え方が根底にあって主張される改憲運動なのか。そして、同じ神社神道でも他の可能性もあるのか」——そういったことをしっかりと多くの人が知った上で、改憲について公共的な議論をすることが大事です。

その上で、日本国民が一般意思、つまり総意として戦前のような「憲法」にしたいというならば、それは民主政治においてはやむを得ない成り行きかもしれません。しかし、私は、多くの人が知れば知るほど、そういう結論には収斂しないだろうと思いつつ、この本を執筆致しました。

今日、この後に鎌田先生のお話もあるので、また後でしっかりとこの辺を議論できればうれしいと思っています。どうもありがとうございました。(講演①終了)

○千葉 小林さん、充実したご報告をどうもありがとうございました。

小林さんが言及された本は、『神社と政治』という角川新書から今年の9月10日に出た本です。非常に情報豊かで、現在、神道というものを考える際に貴重な知見や情報がたくさん入っています。

いまのお話にありましたように、国家神道と国民神道を区別して、民の公共性から、いかに神道を開いていくかというテーマで、私も読ませていただきまして、啓蒙されたと思っています。

続きまして、栗田さんの方からご講演いただきます。

## 講演②「中東情勢と日本・世界のゆくえ」 千葉大学教授(中東研究)栗田禎子

ご紹介いただきました、栗田と申します。今日は「平和と宗教と公共を問う」ということで、いまお話しされた小林先生や、鎌田先生、千葉先生はこの問題に正面から深く取り組んでこられた先生ですが、私は、正直言って、この問題に正面から取り組めるかどうか心もとない状況です。専門は中東の現代政治ですが、私はそれを特に歴史的観点から分析するということをやっています。

これまでお話しされた、あるいはこれからお話しされる先生ほど、正面から平和とか公共性とか宗教の問題に迫れるかどうかは分からないのですが、ただいま平和の問題等が語られる際、「世界的に見て一番情勢が不安定だ」ということで、しばしば引き合いに出されるのが中東の現状ということは事実です。

そこで、例えば、中東における戦争とか暴力というものは、どういう要因で起きているのか。あるいは、いまの中東における戦争とか暴力を考えると、そこにおける宗教の役割、あるいは「宗教的政治運動の役割」と言うべきかもしれませんが、それをどう捉えるべきか、といったことを考えてみることで、多少は今日のシンポジウムのテーマにどこかで関わっていきけるかなと思っています。

早速、内容に入ります。

### ★中東の現在の危機の根底にあるもの

まず、中東の現在の危機の根底にあるものは何か、という点です。いまの中東は、皆さんもご存じのように、大変な悲劇、混乱状態にあります。特に最近は、それが単に中東の悲劇にとどまらずに、最初は「中東の問題」だったはずのものが、いつの間にか、例えば欧州に押し寄せる難民などの問題になっている。ヨーロッパ、アメリカ、あるいは日本も含む、先進諸国をも不安定化させる大きな要因になっているという現実があります。

ただ、そういう問題を引き起こしている根底に何があるのかなと振り返ってみると、例えば、2014年以降、特に2015年ですね、大きな問題となった、ヨーロッパに押し寄せる難民の問題ですが、それがどういう要因で出てきているのかというと、ヨーロッパに押し寄せる中東系難民の半分は、皆さんもよくご存じのように、シリア難民ですね。これがシリアの状況、内戦状態になっているということが背景に、シリアから出てくるわけです。

ただ、ヨーロッパに押し寄せている中東系難民の約半分はシリア難民ですが、あとの半分はというと、アフガニスタン、イラクからの難民なのです。いまはシリア難民に脚光が当たっていますが、中東難民の残り半分は、イラク難民やアフガニスタン難民なんですね。

では、どうしてこういう国々の人々が難民化するということが引き起こされてしまったかということ、過去20数年間、アメリカ主導の中東に対する戦争が行われてきた。

そのときにつぶされたのがイラクです。さかのぼれば、1991年の湾岸戦争から始まるわけですが、最終的にはイラク戦争でサダム・フセイン政権が倒されて、イラクが占領され

る。イラク戦争で完璧にイラクがつぶされる。あるいはアフガン戦争によってアフガニスタンがつぶされる。

つまり、そういう過去 20 数年間のアメリカ主導の中東に対する戦争の中でつぶされた国がアフガニスタンであり、イラクであるわけですね。要するに、中東では、アフガニスタンとか、イラクとか、大国の軍事介入の結果、国ごとつぶされてしまったような国家が、いくつも生まれてしまっている。それが、ほとんど丸ごと国をつぶされてしまったような人たちが難民となって流れ出すという状況をつくり出しているわけです。

「中東難民」というのは、いま国際的に問題になっていますけれども、例えば、いまシリア難民になっている人でも、5年前に「あなたは5年後に難民になっているでしょう」と言っても、誰もそんなことは想像もしていなかった。

2011 年以前は、シリアだって誰もそんなことを想像もしていなかったでしょうが、例えば、アフガニスタンとかイラクの人だって、1970 年代ぐらいに「あなたの人生の後半は難民として世界中をさまよって過ごすんだ」とか、「あなた方の子孫はいずれ難民となって、世界中で寄り添なく暮らすんだ」と言っても、イラク人もアフガン人も、そのころは「そんなばかな」と笑ったと思うんです。

1970 年代は安定していて、アフガニスタンもイラクも、もちろん内政面ではさまざまな矛盾を抱えていたり、独裁政権だったりしたわけですが、そこそこ庶民の生活は成り立っていて、普通に暮らしていたわけですね。それがいまや、ほとんど国ごとつぶされて世界中に離散することになっているという、異常な状況になってしまっているわけです。

中東の難民問題一つ取っても、その背後を見ると、中東の現在の危機の根底にあるものというのが、実は過去 20 数年間、中東に対して行われてきたアメリカの戦争、アメリカ主導の軍事介入だということが分かります。

これは既に述べたように 1991 年の湾岸戦争から始まり、特に 2001 年のいわゆる「9・11」事件後は、「対テロ戦争」、テロに対する戦いだという口実で正当化されるようになって、2001 年のアフガン戦争、2003 年のイラク戦争というかたちで矢継ぎ早に行なわれた。1990 年代から、21 世紀に入るところに、急にアメリカ主導の先進国による中東に対する集中的な戦争というのが繰り返されるようになってきたわけです。それがいろいろな国を壊していった、基本的には現在も中東における大混乱状況の根本原因を成していると言えます。

では、なぜ過去 20 数年間、アメリカをはじめとする先進諸国、大国による中東に対する戦争というのが本格化してきたのかというと、これは巨視的に見るとやはり、国際政治の大きな構造の変化、「冷戦」体制の終結という要因があります。

「冷戦」終結というできごとが持った意味については、さまざまな評価があり得ます。「冷戦」終結前の世界を振り返ってみると、もちろん、いわゆる「社会主義圏」も内部的には非常に矛盾を抱えていた。政治的自由の欠如とか、人権弾圧とかがあったわけです。

ただ、国際政治の構造の問題としては、「冷戦」期というのは、アメリカを中心とする先

進諸国の思惑を牽制する「社会主義圏」というのが現実の政治的な力として存在したので、すべてがアメリカの思いどおりにはいかなかった。米ソがにらみ合って、冷戦下であるというバランスを利用するかたちで、逆にアジア・アフリカ・ラテンアメリカ等の第三世界が自由に行動する余地が生まれるという、そういう時代でもあったと言えます。

単純化して言うてしまうと、いわゆる「冷戦」体制解体後は、現実の力としての社会主義圏がなくなってしまうので、要は、資本主義の勝利、特に最大の資本主義大国であるアメリカの一人勝ち状態みたいな状況になってしまったわけですね。

そのため、冷戦期ではできなかった、中東その他の諸地域に対する直接的な軍事介入が可能になった。冷戦期にはアメリカをはじめとする先進国に基盤を置く多国籍企業に対しては閉じられていた地域、それは、旧社会主義圏だったり、中東だったりするわけですが、これまで閉ざされていた地域に対して新たな利権を求めて、先進諸国が介入できるようになったのが冷戦後の状況なわけです。

その過程では、たとえば旧社会主義圏であるユーゴにNATOが軍事介入したユーゴ戦争もありましたけれども、それ以外はと言えば、先ほど述べましたように、過去 20 数年間の戦争は、圧倒的に中東に対して仕掛けられた。湾岸戦争・アフガン戦争・イラク戦争、という風の中東が集中的に狙われ、それが近年は「対テロ戦争」ということで説明されているわけです。

なぜ中東が過去 20 数年間、圧倒的にアメリカ主導の戦争の標的になってきたかということ、その理由はすごく即物的ですが、石油です。現在の先進諸国国にとって、いまでも一番重要なエネルギー源である石油、その石油の確認埋蔵量の 3 分の 2 は中東にあるという確固たる事実があるわけです。

また、単に即物的に石油があるという直接的な経済的利益だけではなく、例えば、アメリカがロシアに対してにらみを利かせる、あるいは中国に対してにらみを利かせる、国際的な政治の場で他のスーパーパワーに対してにらみを利かせるために、中東を押さえておくということは、戦略的・地政学的に決定的に重要だという要因もあります。

このように石油という観点から言っても、また戦略的・地政学的観点からしても、先進諸国にとって一番重要なのが中東だという事実があり、冷戦構造の崩壊によって国際政治の仕組みが大きく変わった中で、過去 20 数年間、中東がアメリカをはじめとする先進諸国による戦争の標的になってきてしまったということが言えると思います。

## ●「中東」という地域が経てきた歴史的経験

ただ、次に確認しておきたいのは、振り返ってみると、中東が軍事的・戦略的重要性、あるいは経済的重要性ゆえに、先進諸国による侵略とか、実質的な植民地化の対象になるということは、実はいまに始まったことではないということです。

ここで「中東」という概念を確認しておきましょう。「中東」という言葉は、みなさん日頃マスコミ等でよく耳にしますが、改めて確認すると、われわれが思っている以

上に広い地域です。

ご確認いただくと、西は北アフリカのマロココ、それから、その南のモーリタニアも定義上含まれる。西はモーリタニアから、東はどこかという、イラン、さらにアフガニスタンも実は中東に含まれます。

北はというと、北はトルコ共和国。南はというと、エジプトは当然ですが、エジプトの南のスーダン。スーダンも 2011 年に南北が分離して、いまは南スーダンとスーダンに分かれています。これまでは現在の南スーダンまで含めて中東と呼んできた。だから、「中東」とは非常に広くて、西はマロココから東はアフガニスタン。北はトルコから南は南スーダンまでを含む地域を中東と呼んでいる。

中東という概念自体がいつごろに成立したかという、1902 年に、アメリカの海軍提督マハンという人が提唱したあたりが始まりだとされます。「中東」という名称自体に表われているように、これはある意味では、最初から非常に戦略的な概念で、19 世紀末から 20 世紀初頭、まさに欧米中心の帝国主義的な世界の中で、アジア、アフリカをどう征服し、植民地支配していくかという中で出てきた概念だと言えるかもしれません。

「中東」概念は、19 世紀にはむしろより一般的だった「中近東」Near and Middle East という言い方を引き継ぐかたちで、それを 20 世紀になって、このマハンの時代あたりから「中東」Middle East という呼び方をするようになったわけですが、この Middle East という概念は、そもそもどこから見て「東」なのかということから明らかのように、まさにヨーロッパから見た世界観なわけです。ヨーロッパが、自分たちは進んだ「西洋」で、それに対して、遅れた「東洋」というものが存在すると位置づけ、その「東洋」をどう分類して支配しようかと考えたときに、自分から一番遠い地域は「極東」と名付け、近い方は「近東」で、真ん中あたりは「中東」かな、と名付けてみた、という発想なわけです。今日は「中東」と「中近東」の違い（微妙にずれています）、「中東」概念の変遷などの詳細は省きますが、いずれにせよ、「中東」はルーツからしてヨーロッパ中心主義的な呼び方で、それが 19 世紀末～20 世紀初頭に明らかに戦略的・軍事的概念として確立されることになったと言えます。

この中東という名前自体に刻み込まれているように、いまわれわれが中東と呼んでいる地域は、まさに地政学的な、あるいは経済的な重要性ゆえに、遡れば 19 世紀以来、ヨーロッパ列強、先進諸国による侵略戦争や植民地化の的になってきた地域なのです。

石油発見以前の、19 世紀の段階でのヨーロッパの中東侵略というのは、軍事的・戦略的な要因が大きな比重を占めていました。例えばスエズ運河がエジプトで 1869 年開通しました。これによって、当時のエジプトは、地中海・スエズ運河を通過して、紅海・インド洋へと至る、今で言う「シーレーン」の要の一つになってしまった。

当時の世界における「世界の工場」といいますか、先進諸国のリーダーだったイギリス、そのイギリスにとって当時一番重要だった植民地というのはインドです。そのインドへの道を押さえる上で一番重要な、戦略的な要衝のスエズ運河というものをエジプトが擁する

ことになってしまった。

結果的に、スエズ運河を押さえるためには、あるいは「スエズ運河を擁するエジプトを押さえる」ためには、あるいは、当時イギリスにとっての最大の競争相手はフランスですから、「フランスが押さえないためには」自分が押さえるしかない、ということになって、イギリスが介入し、最終的には1882年ですが、エジプトの場合、スエズ運河という軍事的要因が決定打となって、イギリスに占領されるということが起きます。

このあたりは19世紀のいわゆる帝国主義まっさかりの時代で、またエジプトだけでなく、それに先立つかたちで、例えば、1830年には北アフリカのアルジェリアをフランスが早くも占領しています。

さらに20世紀に入るところになると石油の発見と採掘が本格化していく。ご存じのように、だいたい第1次大戦を機に、先進諸国のエネルギー源というのが石炭から石油に転換します。そこで中東の石油を埋蔵している地域としての重要性というのが決定的となります。

中東は19世紀から、エジプトはイギリスに占領され、アルジェリアはフランスに占領され、と、だんだん植民地化が進行化していったわけですが、最終的には、いまのパレスチナとか、イラク、シリアなど、全アラブ地域が、第1次大戦後に英仏によって事実上の植民地として分割されます。第1次大戦の後、さすがにもう20世紀で、民族自決権という考え方なども広まっていき、あからさまな植民地化というわけにはいかないの、国際連盟の「委任統治領 Mandate」というかたちをとります。

これはある意味では非常に偽善的な論理で、もちろん中東地域の人々も、最終的には民族自決権を行使して独立する権利はある、と。ただ、残念ながら、いまはその段階に達していないから、そういうレベルに達するまで、先進国が国際連盟の「委任」を受けて監督してあげなさいというかたちで植民地支配を許す、そういう形式の統治でした。

国際連盟がイギリスに委任統治領として、イラク、パレスチナ、ヨルダンといった地域を与える。あるいはフランスに委任統治領として、シリア、レバノンといった地域を任せ、Mandateする、というかたちで、事実上の植民地化がされました。

既に19世紀からイギリスがエジプトを、フランスがアルジェリアやチュニジアを押さえるといった形で占領・植民地化は進んでいたわけですが、最終的には、石油というファクターが決定となって、第1次大戦後に国際連盟委任統治領というかたちで、事実上は英仏による全面占領、植民地化が完成するわけですね。

この過程で、ご存じと思いますが、イギリス委任統治領と指定され、切り分けられたパレスチナという地域に、イギリスの委任統治当局のお墨付きの下で欧米から移民を受け入れ始めた。移民国家、入植者国家をつくり始めて、それが戦後独立して、いまのイスラエルというかたちを取ります。これがパレスチナ問題の起こりです。

パレスチナ問題というのは、基本的には、第1次大戦後の英仏による中東分割、植民地化の過程で作り出された問題で、要するに、大英帝国の中東経営の都合上、考え出された仕組みですね。いずれ自分たちが植民地に独立を与え、撤退させられるようになった後も、

自分たちの意を汲むかたちで、現地で大国のエージェント的な政治を続けてくれる入植者の国家をつくっておく。入植者国家を埋め込んでおくことで、将来的にも中東を支配しやすくしておこうという考えのもとに、欧米から入植者を連れてきて入植者国家をつくりあげた。

それを受けて第2次大戦後、結果的にはイギリスからアメリカにパトロンを変えるかたちで「建国」宣言をしたのが、イスラエルなわけですね。こうして成立した入植者国家イスラエルが、現地の人、パレスチナの元来の住民のことを「パレスチナ人」と呼ぶわけですが、パレスチナ人から土地を奪ったり、追放したりしたことによって起きている、そのいまま未解決な問題がパレスチナ問題です。

ここで強調しておく、パレスチナ問題は宗教問題だと思っている人がいるかもしれませんが、これは誤りであって、宗教問題では全くありません。パレスチナ問題は基本的にアパルトヘイトとか沖縄の問題とパラレルな、占領や植民地化によって引き起こされる問題として捉えるべきで、ユダヤ教対イスラム教ではない、宗教の問題では一切ないということを確認しておきたいと思います。

話があっちに行ったり、こっちに行ったりしましたけれども、要するに、ここ20数年間、冷戦後の世界で、社会主義圏崩壊の結果、先進資本主義諸国の暴走と言いますか、経済的にはいわゆる「新自由主義」や経済的「グローバリゼーション」が猛威を振るい、政治的・軍事的には、資源があるところ、戦略的に重要な地域には軍事介入をしても許されるという状況が生まれてきている。

その中で中東は標的になってきたわけですが、これは実はいまに始まったことではなく、ほぼ百年以上前から続いてきたプロセスで、19世紀末のいわゆる帝国主義の時代には、イギリスやフランスが中東への侵略・植民地化を進めていた。中東では、いま始まったわけではなくて、翻るとそのころには、すでにそういう経験をしているということを申し上げました。

ただ、20世紀は、特にやはり第2次大戦後の20世紀後半には、中東にも新しい時代が訪れます。中東だけではなく、アジア・アフリカ・ラテンアメリカのAALA地域全体に共通する現象ですが、20世紀後半にはやはり植民地支配の独立運動、あるいは、独立はそれ以前にしていたかもしれないけれども、宗主国が自分の言いなりになる傀儡政権を埋め込むことで、経済的・政治的に支配を続けていた国の場合では、「独立」ではなくて、傀儡政権を倒す「革命」というかたちの変革が生じ始めます。

中東も1950～1960年代にはそういう時代を迎えて、皆さんが一番ご記憶だろうと思うのは、エジプトのナセル大統領ですね。ナセル率いるエジプト革命が1952年に始まります。イギリスの操り人形だった王政を倒して、王政から共和制に転換する。また、土地改革を行ない、王政の社会的基盤だった大土地所有制を撤廃する。さらに19世紀末にイギリスがスエズ運河を狙い占領したときから、延々とイギリスによる占領体制が続いたわけですが、そのイギリス軍を撤退させました。

さらに、エジプト革命の過程では、政治的な主権だけではなくて、自国の経済的発展のあり方を決めるという「経済主権」といった考え方も唱えられ始めて、その過程でスエズ運河の国有化というできごともある。これは同じ中東のイランや、その後のアラブ諸国における石油国有化の動きとも連動していきます。単に政治的な独立だけではなくて、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人々の、自分たちの経済の在り方、社会発展の在り方を決めることも主権に含まれるという考え方が生まれる。いまTPPが大きな問題になっていますけれども、そういうこともちゃんと考え、当時の第三世界の運動全体をリードするような動きをエジプトなどの革命政権が担う時期が訪れたわけです。

先ほど述べたようにこれはちょうど国際的にはいわゆる「冷戦」期で、たまたま第2次大戦後、ソ連あるいは東欧の社会主義圏というのが、現実の力として、国際政治の場で成立し、それによって生じた米ソにらみ合いの状況が、逆に第三世界がその隙間をぬって、政治的あるいは経済的な主権を回復するということが可能にした時期でもあったわけです。

ただ、最初に話を戻しますと、20世紀後半、1950～1960年代というのは、中東にとって、あるいは中東だけではなく、他のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国にとっても、それまでの19世紀の残滓を引きずっているような、帝国主義的な経済的・政治的従属から解放されて、主権を回復する明るい展望が見えた時期だったのですが、それは、最終的には結局、歴史の現実の問題として、冷戦体制の終焉、アメリカの一人勝ち状態の中で崩れ去っていきます。

そういう意味で、中東の人々にとっては、1990年代以降の現在は、「再植民地化」の時代、と捉えられているんですね。この点で、先進資本主義社会に生きる人びとと、アジア・アフリカの人々の現状認識はかなり違っていると言えるかもしれません。

1990年代以降というと、日本だと「冷戦が終わって平和な時代が訪れて、グローバリゼーションの時代になった」という認識が割合一般的で、その際「グローバリゼーション」は基本的に明るいイメージで捉えられていたと思うのですが、中東の人と話すと、「結局は帝国主義に戻った」という反応が返ってくるのです。

ソ連が崩壊し、アメリカがなんでもできるようになって、アメリカが、ある意味ではかつてイギリスやフランスがやっていたようなむき出しの帝国主義的政策、経済的・軍事的な利害のためならどこにでも侵略戦争をしかけるということができるようになった時代になってしまった、「いまわれわれは、再植民地化の時代にあるんだ」という感覚が中東の人にはあるのです。

これは必ずしも誇張ではなくて、現実には、巨視的に見ると、こうした中東の「再植民地化」状況の中で、実際に1990年代以降、最初はイラクのサダム・フセイン政権が隣国クウェートをいきなり侵略・併合するという暴挙に出たことをうまく利用するかたちで、アメリカのブッシュ（父）政権が中東への軍事介入に乗り出した。冷戦後のアメリカが初めて中東に対する大規模な直接的軍事介入をする糸口をつかんだのが、湾岸戦争だったんですね。

さらに先ほども述べたように特に 21 世紀になると、9・11 事件などをうまく使うかたちで、「テロとの戦い」という言い方でアフガニスタンやイラクに介入するようになりました。

そしてアフガニスタンとイラクに対しては軍事的に本当につぶしてしまう、占領してしまつて主権を奪うということをやりますが、実はそれが他の中東諸国に対する一種の「サイン」でもあるわけですね。

というのは、一方で、1990 年代以降の時代というのは、アメリカの圧力のもとに、いわゆる「新自由主義」的な経済政策を世界の諸地域に押しつけていく時期なわけです。アメリカだけでなく、IMF（国際通貨基金）とか、世界銀行とか、先進資本主義諸国の利害に沿った提言をする国際金融機関があつて、そういう機関が援助の条件として「構造調整」を求める圧力をかけてくるといった形で、世界中の国がいわば多国籍企業の資本の論理のもとで翻弄されるようになった。

以前だったら考慮されていた労働者の権利とか国民の生活などは置き去りにされ、いまはもう、日本を多国籍企業が、「企業が一番活躍しやすい国にしましょう」みたいなことを、安倍さんも堂々と言うわけです。資本の論理が全て、という時代になってきているわけですね。

中東もちろん例外ではなくて、90 年代以降、中東にも「新自由主義」的政策を押しつけようとする圧力、多国籍企業に対して門戸を開放して、いろいろな規制も撤廃し、労働法等も緩和して、企業が活動しやすいような国にしろという、IMF の勧告、「構造調整」圧力がかかってくるわけですが、中東諸国に対する場合、実はその裏側に、もし従わないんだつたら、イラクやアフガニスタンみたいにつぶすぞという、そういう脅し、アメリカによる軍事的圧力が実はすごく強くかかっているのです。

だから、アフガン戦争とかイラク戦争というのは、単に軍事的にアフガニスタンやイラクをつぶすだけではなくて、それを背景にするかたちで、中東全体に対して「新自由主義」的経済政策を強いる圧力としても機能していたわけです。

中東の人は、こういう状況を見て、どうも 1990 年代以降、せつかく 20 世紀中ごろのナセルの時代に回復した政治的あるいは経済的な自立、主権というものが、どんどんなし崩しになっていって、結局は先進諸国に対する政治的あるいは経済的な従属が深まっている、いまはそういう時代だという風に認識していると言えると思います。

## ●日本の軍事化と中東

ここで日本のことも簡単に触れておくと、現在、安倍政権の下の日本の政治はとんでもないことになっています。戦後日本の土台になっていたはずの平和主義というものがいつのまにか掘り崩されて、今や戦争ができる国にまっしぐらに進んでいる観があります。

ただ、これは伏線があつたわけで、安倍政権で突然始まつたわけではないんですね。振り返ってみると、やはりイラク戦争を全面支持してしまい、イラクに自衛隊を送つた小泉

政権の責任が大きい。あるいは、その前の湾岸戦争のときにも、日本政府は90億ドル、最終的には130億ドルという巨額の戦費を、アメリカに協力する形で提供している。さかのぼると、いまわれわれがその最終局面を目にしている日本の軍事化というのは、実はアメリカの90年代以降の戦争、特に中東に対する戦争と、軌を一にして進んでいるということを確認しておきたいと思います。

例えば、「PKO法」の問題があります。いま南スーダンに自衛隊が国連の平和維持活動、PKOに協力するという名目で行っていて、それに「駆けつけ警護」という新しい任務を付与しようとしており、武器使用も大幅に拡大することになるので、いよいよ自衛隊が海外で戦闘を行なうことになるのではないかと大問題になっています。ただ、それに反対する人でも、いま国民の多くは、PKO自体は仕方ないんじゃないか、国連に協力するのなら仕方ないかもしれない、とっていて、「PKO法」の存在自体には、あまり疑問を感じないかもしれません。

だけど、20数年前には、これはとんでもないことだったわけです。いまわれわれが何となく当たり前のように思っている、自衛隊が国連に協力するという名の下に国外に出て、そこで実際に武器を持って活動をするということの前提になっている「PKO協力法」ができたのは、実は湾岸戦争の後なわけですね。

湾岸戦争を境に、アメリカが冷戦後の世界の環境の変化を捉えて、今後はアメリカ中心で戦争をやっていくんだという姿勢を明らかにする。それに対して当時の日本政府は、本当はすぐにでも自衛隊を送って参加したかったんでしょが、当時は国民の反発も強かったので自衛隊を送ることはできず、戦費130億ドルを負担するにとどめざるを得なかった。

そこで湾岸戦争後、いきなり自衛隊をアメリカの戦争に協力するために海外に送ったのでは、時の国民の世論が許さないの、だんだんと慣らしていく。その際、国連に協力するんだったらいいでしょう、これは国連の平和維持活動に対する協力なんだから、というかたちで出していく。国民の批判意識を眠りこませていくわけですね。

その最初の一步が「PKO法」だったわけで、結果としていまではわれわれは自衛隊が海外に行くということにいつの間にか慣らされてしまったわけですが、その発端となったのが湾岸戦争だったということは、やはり改めて確認しておく必要があります。

21世紀になってからのことは皆さんもよくご記憶だと思いますが、その後も日本の、歴代の政府は、アメリカ主導の対中東戦争をことごとく支持し、協力してきました。

2001年、9・11事件が起きて、それを名目にアメリカが「対テロ戦争」、これは「テロとのたたかい」と言い方で、アフガニスタン攻撃に突き進み始めると、当時の小泉政権は日本はアメリカのテロとのたたかいを支持する、と言って、即座に協力姿勢を示しました。具体的には「対テロ特措法」というものを作り、アフガニスタンに直接陸上部隊は派遣しませんでしたけれども、インド洋上に自衛隊を送って、アフガニスタンで空爆を行う、アメリカやNATOの軍隊に対する補給を行っています。

さらに2003年、今度はイラク戦争ですね。実際にはなかった「大量破壊兵器」疑惑とい

うものを口実に行われたイラク戦争にあたって、小泉政権はこれを全面的に支持しました。

かつ、初期の戦争、戦闘自体には参加しなかったわけですが、米英等によるイラク占領が始まると「イラク特措法」というものを制定して、とうとう陸上自衛隊をイラクに派遣しました。サマーワにおける「復興支援」という名目ではあったけれども、結局は米英主導の占領体制に協力する、加担するかたちで自衛隊を送ります。

さらに、あまり注目されていませんが、同時に自衛隊はあの日、特にバグダード近郊で空輸活動、米軍兵士とか武器を運ぶ空輸活動もやっていて、実はアメリカの軍事行動にも深く関わっていました。

このように日本はアフガニスタン戦争やイラク戦争に協力してきたわけですが、実はこういう目立った戦争がないときでも、日本政府は着々と自衛隊の海外派遣の拡大、「実績」づくりを進めてきました。

その一つが、例えば「海賊対処法」です。戦争ではないのであまり国民は意識しなかったわけですが、2009年、ソマリア沖で海賊が出没して、石油の輸送、タンカーの航行などにも困難を引き起こしているから、その海賊対策だったらいいだろう、というかたちで、「海賊対処法」という法律を作って自衛隊の艦船をインド洋・ソマリア沖に派遣します。

いまから振り返ると重要なのは、この時、海賊対処活動をやるには陸上の拠点が必要だといって、東アフリカのジブチに自衛隊の基地を設けるということもやる。地元政府と正式に地位協定を結んで、初めて海外に自衛隊の恒常的基地を置くに至りました。

これはアメリカの世界戦略を補完する動きでもあって、実はこの頃からアメリカは、中東に続いてアフリカに対する経済的・軍事的関心を強めていく。アメリカをはじめとする先進諸国にとって、中東はもちろん重要ですが、逆に中東は介入し過ぎた結果、不安定化してしまって、中東の石油だけに頼っているわけにもいかない。

では、中東に代わる石油やレアメタルの宝庫はどこかといったら、アフリカなので、近年、中東だけでなくアフリカに対しても、先進諸国が介入しようという動きが非常に強まっていて、それを補完するかたちで、日本もアフリカに進出し始めているわけですね。

その一環としてジブチに基地を置き、さらに2011年にスーダンから南スーダンが分離独立すると、その独立後の南スーダンに展開中の国連PKOに、当初は、「アフリカで一番新しい国づくりを応援するため」「国づくりに汗を流すため」、道路等のインフラ整備を行なうとして自衛隊を派遣するというのもやるわけです。先ほど触れたように、その南スーダンは現在は内戦状態になっていて、そうした状況下で自衛隊に新たに「駆けつけ警護」任務を付与することが計画されているわけですが。

このように日本の軍事化というのは、実は中東に対するアメリカの戦争というものと非常に密接に関わるかたちで進行してきていて、その過程で昨年安倍政権によって強行された「安保法制」につながる動きが作りだされたのだと言えます。

## ★いま中東はどのような状況にあるか

以上見てきたように、1990年代以降、「冷戦」終結後の中東というのは、巨視的に言えばある意味で「再植民地化」状況にあると言えます。欧米をはじめとする先進諸国からの経済的・政治的自立が再び脅かされてしまい、経済的にも、政治的にも、あるいは占領されているわけですから軍事的にも、従属が深まってしまっているのが、90年代以降の中東の状況なわけです。

ただ、そうした状況が転換する可能性、「潮目が変わる」可能性が一瞬だけあったとすると、それがまさしく2011年でした。2011年に中東に生じた革命状況、マスコミ等ではいわゆる「アラブの春」といわれるものです。これはまずチュニジアで始まり、ついでエジプトでも成功を収めたわけですが、独裁政権を現地の民衆が、思いもかけないかたちで、内側から倒した。民衆の、平和的かつ巨大なデモによって独裁政権が崩壊したわけです。日本や欧米のメディアでは、「遅れていたアラブ地域でもついに民主化が始まった」というような報道の仕方がされました。

2011年に中東で起きたのが、民主化運動であったことは事実です。ただ、同時に重要なのは、そうやって民衆が倒したチュニジアやエジプトの政権とはどのような政権だったかということ、実はこれらはまぎれもなく、90年代以降、中東の「再植民地化」が進行して、欧米の経済的・政治的・軍事的な圧力が高まっていく中で、それに抵抗もせず、唯々諾々として従った政権、中東の政権でありながら事実上先進諸国の傀儡と化して、主権を売り渡しつつあるような存在だったわけです。

例えば、イラク戦争の際にも、中東諸国の政府は表面上はアメリカのイラク攻撃に反対・憂慮するポーズを示しましたが、実は戦争を黙認・協力した。エジプトがスエズ運河を米国の軍艦が通ることを許さなければイラク空爆はできなかったわけで、エジプトのムバラク政権は事実上イラク侵略を手伝ってしまっていたわけです。他のアラブ諸国も同じです。

中東の国でありながら、中東に対するアメリカ主導の戦争に協力してしまっている自国の政権。あるいは中東の民衆のための政府であるはずなのに、アメリカやIMFの圧力に屈して、労働法の改悪とか、医療・福祉の切り捨てとか、そういう「新自由主義」的政策、多国籍企業の利害のためだけの経済政策を国民に押しつけている自国の政権。それが90年代以降、中東で貧困・失業・格差等の問題をもたらしたわけですが、そういう政権を倒したんですね。

つまりチュニジアやエジプトで始まったことは、直接的には国内の民主化を求める運動ですが、実はその背後にある先進国の支配に対してノーを突きつけた運動だったわけです。その意味で非常にラディカルな運動だったと言えます。先進諸国の中東侵略や経済的支配に対する抵抗を、中東における民主化革命、中東を内側から民主化するという形でやってのけた。

それまでアメリカは、アフガニスタンやイラクに対して、こういう中東の国というのは内側からは民主化できないから、外から民主化してあげる、解放してあげるという戦争

をしかけてきたわけですが、それに対して中東の人々が内側から民主化をやってみせたわけです。それにより、先進諸国が今後中東に手出しできないような状況を作り出していく。先進諸国の操り人形となってしまうている中東諸国の政権を倒し、政治を国民の手に取り戻すことで、これまで先進諸国によって押しつけられてきた「新自由主義」路線を拒否し、経済的主権を回復することまで展望されていました。

このように 2011 年に中東で起きたいわゆる「アラブの春」は、国政の民主化を求める運動であると同時に、それにとどまらず、国際的にも注目すべき動きだったわけで、もし順調に推移することを許されていれば、例えば、90 年代から 21 世紀初頭にかけてラテンアメリカで生じた一連の変革に匹敵する流れとなった可能性があるとおもいます。ラテンアメリカでは、いわゆる「冷戦」終結後、世界の他の地域が「新自由主義」路線、資本の利害のためのグローバリゼーションに巻き込まれていく中で、むしろこれに抵抗する動き、アメリカから経済的・政治的な主権を取り戻そうとする運動が発展し、「社会的公正」を重視する政権が次々と誕生しました。

中東で 2011 年に始まった動きも同じような意義を持っていて、あのまま順調に推移することを許されていれば、ラテンアメリカに近いような、各地で革命的諸政権が林立するような状況になったかもしれません。

ただ、中東の場合は、先進諸国にとって、石油という点でも、戦略的にもあまりにも重要な地域なので、ここで革命的状況が発展していくことは、先進諸国がなんとしても許さなかった。革命に立ち上がった民衆のエネルギーをなんとしても封じ込めて、混乱や流血、場合によっては内戦まで引き起こすことで、逆に「中東は大混乱している。これは、やはり先進諸国が介入して、国際的関与によって安定を取り戻さなければならない」と主張できるような状況に引き戻すことが、2011 年以降、先進諸国によってめざされることになったのです。

マスコミ等ではしばしば、中東では 2011 年に「アラブの春」が起きたかに見えたが、いつの間にか「アラブの冬」になってしまった、というような表現が見られます。宗教・宗派对立やら、IS の台頭やら、シリア内戦やら、かえって以前よりひどい状況、「アラブの冬」になってしまったのではないか、という言い方がされるのですが、私が強調したいのは、むしろ「春」があったからこそ、それをつぶすために混乱状況が作り出され、無理やり「冬」にされたということです。

例えば、チュニジアやエジプトでの 2011 年の革命の過程では、注目すべき現象がありました。青年や女性、労働組合などが、大きな役割を果たしたことです。従来、欧米や日本のマスコミでは、中東の民衆の動きというと、中東は非常に独裁政権が多いというイメージがあるわけだけけれども、民衆運動として伝えられるのは、いわゆる「イスラーム主義」的な運動ばかりで、「こういうイスラームに基づく運動があつて、福祉活動等もやって、貧しい人の支持を集めています」といった報道が多かった。なぜか「イスラーム主義」的運動だけに脚光が当てられる傾向があつたのですが、実際には 2011 年にチュニジアやエジブ

トで革命が起きてみると、非常に特徴的な点は、そこで立ち上がったのはイスラーム主義勢力ではなくて、むしろ青年であり、女性であり、特にチュニジアの場合は労働組合であって、そういうまったくふつうの市民が展開した国民的運動によって強権的政権が打倒されたわけです。

これに対し、逆に 2011 年以降、そうやって立ち上がった中東の民衆の運動を封じ込めようとする、女性の運動とか、あるいは労働組合の運動を封じ込めようというときに、「イスラーム」の政治利用という手法が重要になってきたのです。民主的勢力を封じ込めるために、イスラームを掲げる政治勢力というのを支援・強化することが重要になって、そういう「イスラーム主義」勢力というものを、地域内では保守的な、まだ革命が起きていないサウジアラビアとか、カタールとか、トルコとか、そういう国が一生懸命に応援する。

あるいは国際的にも、実は 2011 年から 2013 年ぐらいいにかけて、例えばチュニジアやエジプトにおいて、「イスラーム主義」的な勢力を、実はアメリカやヨーロッパ、EU 諸国が応援するということが現実の問題としてありました。

2011 年のチュニジアやエジプトの革命では平和的・国民的なデモによって体制が倒れたわけですが、それを可能にしたものというのは何かというと、宗教・宗派に関係なく、全ての人立ち上がったということなんです。

われわれは中東というと、何かイスラーム一色のような感じに思っていますが、実際には、イスラーム教あり、キリスト教あり、ユダヤ教ありで、主要な啓示宗教が次々と出てきた地域なので、いまもそれが積み重なっていて、世界的に見てもまれな多宗教・多宗派共存型の地域なわけですね。

例えば、エジプトでも、人口の 9 割はイスラーム教徒ですが、1 割程度はキリスト教徒がいる。それもべつに欧米諸国から来たキリスト教じゃなくて、もともとエジプトにいるコプト教徒というキリスト教徒、エジプトのイスラーム化以前の時代に遡る、非常に古い歴史を持つキリスト教徒がいるわけです。

2011 年の革命のときには、このような中東の多宗教・多宗派共存型の文化伝統というものを背景に、民衆が宗教の違いを超えて立ち上がりました。中東は細かく見ていけば多宗教・多宗派に分かれているわけですが、独裁に対しては団結してたたかう。あるいは、先進国の中東に対する侵略に対しても団結してたたかう。独裁とか植民地支配とたたかう時に宗教の違いは関係ないということで、そういう局面ではまとまる伝統が実はあるのです。民主化のためのたたかいにおいては、イスラーム教徒だろうとキリスト教徒だろうと関係ないという共通の理解があるわけです。

それを象徴するものとして、2011 年の革命の際、たとえばエジプトの街角には「十字架と新月」のペインティングが溢れました。十字架はキリスト教の象徴で、それから、新月（細い三日月として図像化されます）はイスラームのシンボルなのですが、その十字架と新月を組み合わせた意匠、新月が十字架を抱擁しているようなデザインのペインティングが町じゅうに溢れて、要は独裁政権を倒すためにイスラーム教徒もキリスト教徒もまとま

っていこうというメッセージが強調されました。

これは実は、エジプトの近現代の革命史上、伝統あるシンボルで、先に触れたようにエジプトは 19 世紀末にイギリスに占領されたわけですが、そのイギリスの植民地支配に対する抵抗闘争というのが起きていて、そのときにもこれが出てくる。第一次大戦直後の「1919 年革命」という運動が有名ですが、その際にもこのシンボルが用いられています。当時イギリスがエジプトを占領していて、「分割して統治せよ **Divide and Rule**」という、まさに植民地支配のための政策をとって、エジプト国内のイスラーム教徒とキリスト教徒の対立を煽ろうとするわけですね。これに対し、デモに立ち上がる人たちは、占領に対する抵抗の過程では、キリスト教とイスラーム教の差など問題ない。みんなエジプト人だ、団結してたたかおうというわけで、町中に「十字架と新月」の旗が溢れたという歴史があります。

それが、今度は独裁体制に対するたたかいの中でもう一度思い出される。民主化のためのたたかいに宗教の差は関係ないということで、人々は宗教・宗派を超えて立ち上がったわけです。

話を戻すと、そうであるからこそ逆に、中東における変革の動きをつぶすためには、こういう民衆の運動やエネルギーを、分裂させ、封じ込めてしまうことが必要になってくる。その中で例えばエジプトの場合には、やはりイスラーム教徒とキリスト教徒の対立をあおる、そのためにもイスラームを政治利用する「イスラーム主義」運動の勢力を伸長させる、といった手法が追求されることとなります。

あるいは、たとえばイスラームの中のスンナ派とシーア派という宗派間の対立をことさらに煽るような動きが、意図的に行われるようになる。いま、TV の中東情勢解説などでは、「サウジを盟主とするスンナ派とイランを盟主とするシーア派の対立」という話がしきりに出てきて、シリアの危機などもこの図式で説明されがちですが、この「宗派対立」というもの自体が、2011 年以降に急激に煽られ、深刻化してきたものであることに注意する必要があります。

やはり 2011 年革命で爆発的な民衆のエネルギーが発揮されたという事実がまずあって、それを支えていたのは宗教・宗派を超えた団結だったからこそ、それを壊そうとする中で、宗教・宗派対立を扇動する、あるいはもともとは民主化運動だったものを、意図的に宗教的な内戦へと誘導し、すり替えていくということが行われたのです。

その結果、特に悲劇的な状況になったのがシリアです。シリアはある意味では、チュニジア、エジプト、イエメン、バーレーン、と広がっていった 2011 年中東革命の波を、アラブ諸国の支配層、先進諸国の操り人形である支配層の人々がどこかで止めようと模索する中で、たまたま、「ここで止めよう」という場所選ばれてしまった、とも言えると思います。別にシリアでなくてもよかったのですが、とにかくここを舞台にして民主化運動を宗教的な内戦に変質させ、思い切り悲惨な状況、混乱状態を作り出すことで、革命に向かいつつあった中東全体に冷水を浴びせるような効果が作り出されたのです。ここで中東革命を止める場所としてシリアが選ばれました。

その過程で、具体的にはシリアの場合、もともとはアサド独裁政権に対する民主化闘争として始まったものを、ある時点からサウジアラビアとか、カタールとか、トルコとか、域内の非常に保守的な反動的な諸国、背後にアメリカがついているわけですが、それが一部のイスラーム主義武装勢力に対する、武器援助・資金援助を始めました。それによって、最初は民主化闘争だったものを、いつの間にかアサド政権とイスラーム武装勢力の間の「内戦」転化させてしまったのです。当初民主化を求めていたふつうの市民は、悲惨な内戦状況下、いまはもう声も上げられないような状態になってしまっているわけです。

以上をまとめますと、1990年代以降、先進諸国に対する中東の従属が強まり、「再植民地化」と言われるような状況が進むなかでも、2011年中東革命によって一瞬「潮目が変わる」可能性が生じ、内側から民主化を成し遂げることによって、中東が先進諸国にこれ以上介入されないような状態を作り出し、経済的・政治的自立性を回復しようとする動きがあったのですが、それをつぶそうとする中で、「イスラーム主義」的勢力を支援するとか、あるいは宗教・宗派の対立を煽るという政策が、欧米も明らかに関与するかたちで行われました。

その結果生み出された矛盾の、一番極端な例がいわゆる I S、「イスラーム国」というものですね。I S の成り立ちについてはもっと詳しい説明が必要ですが、非常に巨視的にはその背景には、2011年以降の中東のこのような状況のなかでの欧米や中東の保守的諸政権の思惑、「イスラーム主義」勢力支援・育成という事実があり、それから特に I S の場合は、イラク、シリア両国内における展開が重なり、合流するかたちでいまの状態になっていることが指摘されています。イラクではイラク戦争後のアメリカの占領体制下でスンナ派とシーア派を分断統治し、「宗派对立」をおおる政策がとられ、これがフサイン体制崩壊後成立したシーア派主導の政権に対するスンナ派系の住民の不满を背景に、I S の前身組織が勢力を伸ばす要因となったと言われます。他方シリアでは、これまで見てきたように、混乱状態を作り出し、民主化運動を頓挫させようとする力が働くなかで、「イスラーム主義」勢力が成長し、「宗派对立」が激化してきました。イラクとシリアにおけるこのような展開が合流した結果、I S という非常にグロテスクな存在、それは結局は中東に対する先進諸国の介入が生み出したものであり、同時に先進諸国が今後も介入を続ける口実を提供する存在でもあるのですが、が形成されることになりました。

### ★わたしたちは私たちは平和のために何をすべきか。どこで頑張るか。

こういう話をしていくと、たいてい最後の質疑応答のなかで、「では I S のような問題と立ち向かうためにはどうしたらよいか」という話題になったりします。「本来のイスラームとは違うんですね」とか、「本来のイスラームとは何かということ、もっと中東の人と話し合う必要がありますね」という話になっていたりします。

あるいは最近では、中東につづいてアフリカの情勢も不安定だが、「南スーダンの紛争を解決するために何ができるでしょう」という話題になることもあります。

こうした議論が出るのはごく自然なことで、大いに話し合うべきテーマでもあるのですが、一方で私は、わたしたちがいまの世界における平和の問題を論じる際には、その大前提として、いまの世界における戦争や混乱はいったい何によって引き起こされているのか、その基本的構図を冷静に把握する必要があると思っています。話を最初に戻すと、いまの世界の基本的な混乱の元は、先進諸国における中東やアフリカに対する軍事介入、戦争であり、日本の軍事化というのも、まさにそのアメリカの戦争の片棒を担ぐかたちで起きているので、ある意味では、世界にとって何が最大の危機かという、アメリカの中東やアフリカに対する介入こそが最大の問題で、それをどう止めていくか、あるいは日本がどう「手伝わないようにしていくか」ということの方が、日本のわれわれにとって、まず考えるべき課題ではないかと思うのです。

例えば、「I Sと安倍政権と、どちらが危険か」という問題を考えてみましょう。もちろんI Sがきわめて危険な存在であることは自明です。やっていること自体がきわめて暴力的で言語道断ですし、I Sは巨視的にみた場合、明らかに欧米が中東を混乱させ介入するためにつくりだしたテロ組織（「9・11」事件を行なったとされる「アル・カーイダ」もそうです）の系譜に連なる存在ですが、そういう組織がいまあのように猛威をふるっているのは、いうまでもなく大問題で、恐るべきことです。

ただ、そのI Sと、安倍政権、日本は、かつては世界第2位の経済力を持つといわれ、最近は何位か分かりませんが、やはり経済力で言えば一応世界で五指に入るような勢力であるわけですが、そういう経済大国、先進諸国の一国である日本が、戦後守ってきた平和主義を捨てて、軍事大国化の道に足を踏み入れようとしている、そのことを比べてみて、「I Sと安倍政権、どちらが危険か」というと、客観的には安倍政権だと私は思います。だからわたしたちにとっては、「I Sとどう立ち向かうか」よりも、「安倍政権をどうすべきか」の方が取り組むべき課題なのです。

ですから、いま平和のために何をすべきかといったら、基本は日本で頑張る。最後はそこです。安倍政権が「平和憲法」を改憲して、いよいよアメリカの戦争に全面的に加担していこうとしている。それを日本という場所で止めていくことこそが、日本のわたしたちが世界の平和のためにできる最大の仕事なのではないかと思っています。

時間配分がまずく、申し訳ありませんでした。ありがとうございました。（講演②終了）

○千葉 栗田さん、大変熱のこもった興味深いご講演、ありがとうございました。

大変情報豊かで、重要な論点、視点をたくさんもらったように思います。

ここで10分ほど休憩いたしまして、第3番目の講演、鎌田さん、お願いいたします。

（休憩）

○千葉 それでは、10分たちましたので、鎌田さんの方からお願い致します。

**講演③「平和と神道の問題性と宗教の未来～ゆずりとゆるしによる変容と公共」上智大学グリーン  
ケア研究所特任教授・京都大学名誉教授 鎌田東二**

**はじめに～三つの前置き**

「平和と神道の問題性と宗教の未来～ゆずりとゆるしによる変容と公共」という話をする前に三つの前置きを話します。

一つは、東日本大震災後のことです。本当に日本に神社とお寺があつてよかつたと実感しました。被災地を巡っていて、一番ほつとしたのは地域社会の中で神社とお寺が無事で避難所になったり拠り所となつたりしていた点です。広域にわたつて大変な被害を受けた中で、何を手掛かり足掛かりにしながら再建していくことができるかを考えていったとき、やはり地元にお寺や神社があるということは、深い拠り所となり、安心を生み出します。

それが実際に具体的にどう現れたかという、東北地方にはイタコなどの霊媒が死者の口寄せをするということがあつて、シャーマニズム的な民間信仰の非常に強いところですから、亡くなった人、死者を供養するということや、亡くなった人たちに霊的に対面することがとても重要な意味合いを持ちます。それらは主に神仏習合的な文化を持つたお寺が担つてきて、お寺とつながる民間信仰的な仏教的シャーマニズムがそれを支えてきたわけです。

同時に、神道の中にあるシャーマニズムとも微妙に絡んでいます。また、神社の方は、神社の境内に駆け上がつて助かつた例が多々あるように、避難地や避難所になりました。神社の多くは小高い山にあるので、そこに津波が押し寄せてきたとき、高台になっている神社の境内に駆け上がつて助かつたという人はあちこちにいます。

町の中にある神社もありますが、神社は多く鎮守の森のような、木が多いところ、小高いところが圧倒的に多い。その土地、地形、地質の中でもっとも安全な地帯に鎮座します。例えば、『となりのトトロ』のような巨大なクスノキがあつたりするわけです。千年以上にわたつて巨大なクスノキが生え続けているということは、そこが安定した地盤だということを証明しています。

そういう安定した地盤が神社として今も残っている。そこには教義的な思想性という点では明確なものはないけれど、その場所ですつと祭りを行なつてきたり、人々が五穀豊穡や家内安全や商売繁盛などの日常的な願い事をしてきたところ。生活の安心と安全を一番大切にしてきたところが神社です。

そういう神社の中で祭りが行われ、例えば、岩手県の場合は特殊な、獅子舞に代わつて虎舞が行なわれてきました。獅子じゃなくて虎なんですね。仮設住宅に入っている被災者のところに行つて、虎舞をやる。するとみな大いに活気づく。そんな事例がたくさんあります。

地元の神社に伝わってきた祭りの中で行なわれてきた民俗芸能がこの時どれほど励みと助けになったかということを再認識させられました。そこで、日本の各地域にコンビニよりもたくさんの8万余社の神社や7万5千寺ほどのお寺があることの持つ意味を、これから平和や安心や安全という社会的公共を考えていく際にもう一回注目すべきだと考えています。

2点目は、湾岸戦争は1991年1月7日のイラク侵攻に始まりますが、そのことを報道で知った時、私は本当に絶望的な気持ちになりました。ジョージ・ブッシュ大統領がイラクを攻撃すると言った時になんでこうなったのと歯噛みしました。

というのは、私は、元号が平成になった1989年から、時代は大乱世になっていくと直観していたからです。なぜならば、日本で「平」が冠で付く元号は2回しかないんです。平治の乱(1159年)が起こった「平治」と「平成」の2回しかない。

保元元年(1156年)に皇位継承をめぐる大混乱と戦争が起こります。それが保元の乱。その3年後、平清盛と源義朝が激突しその後武士政権になっていきますが、それが平治の乱。「平氏が治める」とも読めますね。

この平治の乱をすぐに想像したものですから、それ以前から、1980年代はやばいと思っていたのが、元号が平成になった時に、一挙に真っ暗な状態になった。

以来、「現代大中世論」を主張し、今はそれを「スパイラル史観」と言っています。それは古代と近代、中世と現代が大きな局面で共通した構造を抱えていて、先の時代の問題構造が隔世的に次の時代に現れてくるという史観です。つまり、積み残した課題がリサイクルしている。そんなスパイラル史観という歴史的な見方を仮説的にするようになります。

スパイラル史観で見れば、古代と近代は非常に似ている。巨大な帝国や大きい国が中央集権的に政府をつくり上げて強権的支配をしていくという構造です。

古代の場合は、中国の唐の律令を日本に導入します。近代の場合は、プロシアや欧米をモデルにして、日本の法体制をつくり制度改革した。

しかし、それが崩れていって多極化する。令外の官ができる。征夷大將軍も令外官で、1192年に源頼朝が征夷大將軍になる。その前に源平の合戦が起こり、1185年に壇ノ浦で平氏は滅亡しますね。

その令外官が、今世界史的に見ると、アメリカが征夷大將軍になって世界を軍事的に支配していると中世史と現代史を重ね合わせて見るようになったんです。

米国の征夷大將軍化と、日本の源平の合戦。その後、北条政権になり、足利政権になり、どんどん政権は交代していますが、基本的には、武断政治の権力が一方にあり、もう一方で天皇や公家の権威が律令制度としてある。

この二重体制が中世と現代の特徴である。今現在の「日本国憲法」も、米国支配の中の二重体制的な構造の中での「平和憲法」である。その葛藤と矛盾をずっと抱え込んでいる。こういうスパイラル史観が一つ。

そこで、中世において何が一番突出したかということ、死体です。「メメント・モリ」の中

世は、死体の氾濫する時代であった。その死体の氾濫は、十字軍の戦争であるとか、源平の合戦であるとか、南北朝の乱であるとか、応仁の乱とかの戦争でした。

さらに加えて、『方丈記』を見れば分かるように、地震、津波、疾病が頻発した。自然災害と人災が次から次へと押し寄せてくるという大混乱期を迎えた。しかし、その大混乱期に、死を前にして中世人は問い掛ける。

何を問い掛けるかということ、どうしてこんな時代になったのかと歴史を問い掛けたのです。その時初めて日本に歴史哲学が生まれ、「道理」が変遷していったという歴史哲学が生まれました。天台座主を4回も務めた天台僧慈円が『愚管抄』を著します。この『愚管抄』が日本の歴史を考察する日本最初の歴史哲学書になります。

戦争や災害による多数の死体を目前にする時、人は「死」の起ってくる由来である「史」（歴史）を問い始めます。どうしてこんな時代になったのか。どうしてわれわれはこういう状況に陥ってしまったのか、そのことを反省し、歴史を吟味します。

今も私たちは、歴史振り返り、それも人類史や地球の歴史を含めての歴史をもう一回よくよく見直す必要があります。

加えて、中世に重要だったのは、歴史を振り返るだけでは、人間の心は鎮まらないということ。では、何をするかということ、歌を歌った。それは何かということ、『平家物語』です。つまり、源平の合戦で亡くなった人たちを、いかに供養するか、鎮魂するか、そして心を安定したものにするか。戦争で亡くなっていった敗者の怨霊を鎮めなければ安心のある安定した未来はない。

心の安定化を図るために、『平家物語』のような大叙事詩が生まれてきた。NPO 法人東京自由大学の学長だった海野和三郎先生（東京大学名誉教授・天文学者、1925年生）のご先祖の海野行長がその『平家物語』の原作者です。

吉田兼好の『徒然草』の中に「信濃前司行長（しなののぜんじゆきなが）」が盲目の生仏（しょうぶつ）に覚えさせて語らせたとあります。海野和三郎先生は、その子孫ですが、世界有数の天文学者となって私たちと一緒に東京自由大学を始めました。

そのような、死体から歴史を振り返り、『平家物語』のような叙事詩を歌うことによって鎮魂供養していくという「死－史－詩」の道筋が生まれてきたのです。これが中世の死生観、メント・モリをもう一回浄化していくような動きであったと思います。

三つ目は、3年前の2013年に、出雲大社の60年の遷宮と伊勢神宮の20年の式年遷宮が同じ年に行なわれました。それぞれ1400万余、800万余と、どちらも大変たくさんの数の参拝者が訪れ、その後も継続して参拝者が訪れている。

この8月末にも出雲大社へ参拝に行きましたが、神社に対する見方は、政治的な目もありますが、同時に、日本文化や防災を含む日本の歴史の根源から考えていくという動きの中で再注目されている面もあると思います。

## 一 出雲神話が問いかけるもの

そういう中で、私は、出雲神話をもう一度きちっと考え直さなくてはいけないと考えています。日本の神社が伊勢の神宮と出雲大社に代表されるとも言えるからです。伊勢は皇室として日本の表の文化をつくり上げてきました。それに対して、出雲とは、いったい何なのか。出雲は、どのようにして生まれてきたのか。

出雲に一番重要なのは、歴史とポエジーです。出雲の元はスサノヲノミコトと大国主神で、その二神ともに歌の名手です。『古事記』や『日本書紀』で最初に歌を歌ったのはスサノヲノミコトです。「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を」。

こういう歌の始まりと成りたちを知ることにより日本文化の根幹に何があるかを自覚することができます。もう一つ、スサノヲノミコトの乱暴狼藉が原因になることによって、天照大神が天岩戸に隠れたために、アマテラスをもう一回呼び出すために祭りを行うことが始まります。つまり、歌の発生も祭りの発生も、ともにスサノヲノミコトが関与しているということになります。

このように、歌と祭りは、スサノヲノミコトが原因で、とりわけ歌はスサノヲ本人自らが歌うというかたちで始まった。この歌と祭りが、日本の文化や神道の中にどう受け継がれていったのか。

宗教、宗派、教団、教派を超えた、宗教の大きい特徴は何かというと、どの宗教や宗派でも神話や儀礼や聖地があるということと、宗教の多くが「ゆるし」を説いているということです。

「ゆるし」という言葉がふさわしくなければ、『古事記』の中では「ゆずり」ということになったり、共存というかたちになったり、受け入れるということになったりします。その「ゆるし」が実現しないと、共存はあり得ませんよね。なぜならば、許さなければ徹底的に相手に対して復讐を仕掛けていくということになりますから、必ずそこに復讐の連鎖が起こります。

キリスト教においても、仏教においても、「ゆるし」は極めて重要です。例えば、仏教の場合だと「怨親平等」、敵を恨まないということが、ブッダの時代から説かれています。例えば、『ダンマパダ（法句経）』には、「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」と説かれています。敵を恨むことがあれば争いが途絶えることがない。争いをなくすためには、その恨みを捨てることから始めなければいけないと初期のブッダの教えの中にあります。

ほぼ同じ時期に、墨子が「兼愛」を説いた。最近の言葉だと「友愛」ですね。博愛、友愛。そういう友愛主義を唱えた。イエスは、もちろん友愛の一番純粋なかたち、愛と赦しを説いた。そういう「ゆるし」の思想と実践が宗教の根幹にあります。そしてそれが、慈悲や愛を支えている根っこにある。

では、それはどうやって成り立つのか。実際問題、自分の子を殺された親が、相手を許すなんていうのは本当にできないですよ。人間的なレベルでは、ほとんど不可能だと思

います。でも、人間的に不可能なレベルを乗り越えるというか、越えさせるのが宗教です。

仏さまとか、神様とか、ご先祖さまとか、もっと大きいはたらきや力の中で、今いまあるわれわれのポジションをもう一回見直していく大きな超越的な視線を持つことによって、私たちの未来や過去をもっと大きなまなざしで見つめ受け止め受け容れていくことが宗教の場合は起こり得ます。人間的な心のレベルでは不可能なことが宗教的超越によって可能になるのです。

また、そういうことが実践として重要だということを明確な教義として説いたりもする。しかしそれは、実践を伴わなければ、言葉だけのきれいな事で空洞化します。キリスト教の歴史の中にも、さまざまな宗教の歴史の中にも、きれいな事だけで、言説だけで理想を説いたこともあった。でも、その一番根幹のところ、人間業を超えることを宗教は含んでいる。だからこそ、危険でもあり、すごい面を持っているのです。

では、神道の立場から見ていくと、『古事記』や『日本書紀』の流れから見ていったら、何になるかということを中心に考えます。そしてそれが近代日本の宗教史の中でどう現れているかということを中心に申し上げて、許しや譲りの問題が、具体的に神話や日本の歴史の中でどう現れているかを見ていきます。

まず、『古事記』。先ほど『古事記』には、出雲系と伊勢系の大きな二つの流れがあって、表は伊勢系になった。裏、陰の部分は出雲系になっていると言いました。

その出雲系の神々は「国つ神」とも呼ばれ、先住の神々と言えます。そこに新しく新来者として天孫降臨してきた系統が天照大神からニニギノミコト、今いまの皇室、天皇に至る流れになってきます。

この時、「国譲り」を行った。では、この「国譲り」は服従なのか、屈服なのか、征服されるということなのかと考えると、それは実に奇妙な構造です。単に征服ではない。単に服従でもない。これは、いったいどういう構造なのか。

私は、『古事記』を読めば読むほど、「国譲り」とはいったい何だろうと不思議に思ってしまう。それは単に政治神学に説かれた神話ではない。もっと哲学的に、人間と社会の構造的な問題がここにはあると思うようになりました。

起承転結でまとめると、『古事記』の上巻は四つの流れが書かれています。国生み・国作り・国譲り・国治めの四つの流れです。

第一に国生み神話。イザナギとイザナミが国をどんどん生んでいきます。その生んでいった国を発展させるためには、第二に「国作り」をしなくてはいけない。その「国作り」をするのが大国主神、出雲の神々になります。大国主神はスクナビコナの神と協力して国作りをします。

しかし、そこから大転換して、せっかくなつく国を譲ります。これが第三の「国譲り」の大転換。この時、天から降りてきた天孫が自分の方に支配権があると主張して、そちらの方に譲るといふことが行われるのです。

葦原中国と呼ばれているのが、この日本列島の現実世界で、大国主神が中心となって国

作りされました。しかしそこは、天照大神の子孫が統治する国だされアマテラスの子どもであるアメノオシホミニノミコトに派遣が命じられます。

その命令を実行する前に、先遣隊が送られます。その先遣隊長がアメノホヒノミコトです。このアメノホヒノミコトの子孫が、今の出雲国造家の千家や北島家の先祖なので、出雲国造家は、天照大神の子孫ということになります。つまり、先祖を迎れば、天皇や皇室と兄弟になる。

しかし、そのアメノホヒノミコトは、大国主神に媚びついて、3年が過ぎても復奏しなかった。返事をしなかった。

ここで考えるべきは、仲良くなる一番の具体的なかたちは、同族になったり結婚をしたりするという事です。異質な者同士が結ばれるということです。大国主神の戦略というのはしたたかというか、すごいなと思うのですが、懐柔というか、自分の方にアメノホヒノミコトを取り込んだわけです。

そこで、次に第二弾が派遣されます。アメノワカヒコです。アメノワカヒコが弓矢を持って派遣される。ところが、行ったところで婿入りをしてしまう。大国主神の娘の下照姫と結婚して、今度は3年どころか8年経っても返事をしない。

そこで、しびれを切らして、スパイというか、探知者を送る。それが鳴女。その鳴女の鳥を送り込んだところ、矢で射殺された。そこで反対に、その矢を射返したら、それを放ったアメノワカヒコに突き刺さって死んでしまう。

そこで続いて第三弾として、鹿島神宮の神、奈良の春日大社の第一殿に祭られているタケミカツチの神が派遣されることになります。そしてそこで全権大使として「国譲り」の交渉をし、そこでようやく「国譲り」が実現した。

しかしこの時、大国主神は、自分では返事をせず、まず子どもたちに先に返事をさせたのです。美保神社に祭られている事代主神という長男の神に返事をさせたら、この国を天つ神の御子に奉りますと返事をした。

次に弟の建御名方神返事をさせたら、「俺たちが一生懸命つくったものを、なんでおまえらにやらないといけないんだ。そんな理不尽なことは到底承諾できない」と言って戦いを挑んできた。

そして、「力競べ」をして、タケミカツチ、鹿島の神とがっとうをつかみ合ったところ、手がつららようになって、相手の力で切り裂かれそうになったので、恐れを成して逃走に逃走を重ねて、諏訪の地まで逃げて、以後、そこから出ませんということを約束した。そこに後に諏訪大社が創建されることになる。

このような子ども二人の返事後、大国主神は最終的に、子どもたちが国譲りを承知したので、私もこの国を譲り渡しますと返答します。しかし、この時、その代わり、出雲大社（杵築大社）を創建してそこで丁寧な祭ってほしいと条件を付します。

そうしたら、表の側は天孫系のスメミマノミコトが治め、裏の方、「幽（かく）り」の世界は、自分たちが責任を持って治めるという約諾が交わされますが、『古事記』と『日本書

紀』では微妙に違いを持って語られます。

この後『古事記』では、巨大な宮殿、天御舎が建って、そこで天の御饗、つまり、おもてなしの祭りが行なわれます。立派な神殿に立派な神饌をお供えして祭りが行われる。この「国譲り」という一種の和解的約諾によって初めて平和的環境が整って天孫降臨できたということが具体的に書かれています。

ここのところは、どう考えても、不思議な解決法です。普通ならば、激突して戦って勝敗を決する。そのような対立・対決ではなく、大国主神は、巨大神社を建てて「顕幽」分離することによって和解の道を探るという離れ業をやった。超ウルトラ C ですね。この敗者の側の論理というか、条件闘争というか、こういうものが持つ意味は何なのかということをお私はずっと考えてきました。

そもそも大国主神は日本神話最大の敗北者です。まず、大国主神は生涯で2回殺されています。しかも、兄神たちに2回も殺されて、母神たちの力で2回も甦った再生神なんです。1回目は、お兄さんたちに嫉妬され、策略により、焼けた大石の下敷きになって殺された。でも、細胞による再生医療のように、母神や女神たちが再生してくれた。

I P S細胞というよりS T A P細胞ですね。S T A P細胞は酢をかけたなら再生できるようですから、「母の乳汁」をかけて実験管のような蛤の貝の中に焼けた細胞を入れて再生したのですから、まさにS T A P細胞再生医療で、エジプトのオシリス・イシス神話みたいに再生できた。これが1回目。2回目は、木の股に挟まれて殺された。

あまりに殺されるから、これでは身が持たないといって、先祖のスサノヲノミコトのところに行ったら、今度はスサノヲノミコトに無理難題を課せられて、毒ヘビの部屋に一晩入れられるとか、いろいろな試練が課せられ、終には、野原で火を放たれて焼けて死にそうになった。絶体絶命の3度目のピンチ。

でも、いつも大国主神には助けと救いがもたらされます。大国主神が救った因幡の白ウサギが助けてくれるとか、スサノヲに焼き打ちされそうになった時には、ネズミがやって来て、ネズミが「内はほらほら、外はすぶすぶ」と言ってヒントを与えてくれた。つまり、内には洞のような穴があるから、そこにいて隠れなさいということを示唆してくれたので、洞窟のような、防空壕のようなところに入って助かった。

こうして課題解決を突破した大国主神はスサノヲの娘のスセリビメと結婚して、出雲に帰って国作りをしていくという流れになっている。このように、大国主神は死と再生の神なんです。重要なのは、死んでも甦ることを繰り返している神であるということの持つ象徴的な哲学や思想であり、その特異な弱いけれどもしぶとく強靱なキャラクターですね。そういう不思議な再生力や協働力が大国主神にはあります。

こうして結局大国主神は、天から降りてきた神と激突せずに棲み分けつつ共存します。「幽りの世」につながる出雲大社に祀られ存在し続けてます。そして、60年に一度、遷宮をします。伊勢は20年に一回、式年遷宮をしますが、出雲では、そのような隠れた世界で繰り返し繰り返し祀ら続け大きな社殿が継続されて再建され、今に至るもお縁結びの神

様として崇められている。

## 二 出雲神話の近現代の再奏としての大本

次に、この出雲神系を近現代に受け継いだとも言える神道系新宗教の大本の話をしてします。出雲系の神道は大本に引き継がれていきます。大本は、明治 25 年、出口なおによって書かれたといわれている「お筆先」が世に出てくることによって登場してきます。それを基に娘婿でもう一人の教祖の出口王仁三郎がテキスト化したものが『大本神諭』といわれる聖典です。その一番始めに次の言葉が出てきます。

「三千世界一同に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獣類の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。外国人にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ眼が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ。是では、国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へ立直しを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然、新つの世に替へて了ふぞよ。三千世界の洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ」。

このような、激しい神託、神々のマニフェストとして、『大本神諭』が世に出てきます。

この大本が担っている日本の歴史の中での象徴構造は、敗退して国譲りをした出雲大社系の、裏に隠れて日本を支えているものが再度世に出てくるという神話・神学です。近代化の過程で、表の方ではどうにもならなくなり、人民は苦しみ、外国（害国）に支配されていく状況になって、文明は発達したかに見えるけれども、差別や強権的な体制が出来上がって、人民と社会の苦しみ、苦難は最大級になってきた。そこで、日本の古くからの神、もともとの隠れていた神、ここでは大国主神とは言わず、「良の金神」と言われる「元の神」が出してきて、世の中を水晶のような、「霊主体従」の世の中に洗濯し、大再構築をして、この世界を新たな世にするんだという、宗教的なマニフェストを打ち出します。これを、「世の建て替え立て直し運動」、つまり、「世直し運動」として推進していった。

その世直しの先陣を切ってきたのが黒住教や天理教の「陽気ぐらし」であり、金光教の「取次」です。こうして、神と人との間を新たな形で再生に向かわせる取り次ぎをするために大本が現れたということを、「お筆先」（大本神諭）に、次のような言葉で表しています。

「東京で仕組を駿河美濃尾張大和玉芝国々に、神の柱を配り岡山。天理、金光、黒住、妙霊、先走り、とどめに良の金神が現はれて、世の立替を致すぞよ」。

つまり、神様のはたらきというのは、さまざまなかたちで人々の中に立ち現れてくる。天理教や金光教や黒住教として現れる。そのような神のはたらきが、今の日清・日露戦争が起こって、日本が帝国主義的資本主義の一陣になっていく世界情勢の中で、物質中心の「体主霊従」の世から「霊主体従」の方向へ転換させるために、先行する宗教が幕末から出てきたけれども、とどめの段階で「良の金神」が現れて、世の建て替えを本気で行なう

と主張したのです。

では、日本を建て替えるはたらきの原理は何かといたら、今言った「霊主体従」原理。つまり、霊的・精神的な人間のあり方を基盤にして、みたまを磨いて、物質的なものを従にし制御しながら生きていくという生き方です。そうした「霊主体従文明」を作ることが方向性として示されます。

この「霊主体従」原理は出口なおの「お筆先」に基づきますが、それを元に出口王仁三郎は「霊学」を整備していきます。

そうした「霊主体従」的「世の立替建て直し」の世直し運動が大正10年(1921)に第1次大本事件が起こって、不敬罪と「新聞紙法」違反で逮捕されます。この時、逮捕されて、宗教活動ができにくくなったときに、出口王仁三郎が『霊界物語』という物語を口述筆記し、そしてやがて「明光社」という芸術芸能結社を作って芸術運動の方へ転換し、モンゴルに行ったり、自然農法などのさまざまな活動をしていきます。また、エスペラント運動、より普遍主義的な「人類愛善」運動を展開します。

他の教団、例えば、中国の道院・紅卍字会やイランのバハイ教など、海外の新宗教教団ともタイアップしながら、より共生的・協働的な宗教・宗派を超えた超宗教の運動や活動をしていこうとした。そしてそれを「スサノヲの道」と言うようになります。

私自身は、出雲が抱えてきた「国譲り」の問題と構造を、近現代に象徴的なかたちで具体化した大本の宗教史的意味、その現代世界的な意味をもう一回汲み上げながら、これから先の未来というものを考え直していきたい。

私は、神道の根幹は、場所性にあると考えています。木、森、泉、岩、その偉大さを畏怖畏敬する自然崇拝が根本であると。自然の持つムスヒの力を畏怖畏敬し恭順に生きる。神道のもっとも大切にしている価値観は、自然を生み出していく「ムスヒ」の力とはたらきへの畏怖畏敬と信仰です。それを別の言葉で表すと「生態智」になります。

それが一番の根幹になって、人間的な世界の公共のみならず、もっと大きな「生命的な公共」を、実現し共有していく。そうした「生命的公共」なしには、本当の安心、安定、安全、平和というものはない。

資源の確保競争や奪い合いになって地政学的な戦略による覇権の達成を求め構築していくようでは、一層の破壊や波乱は起こっても、安全も、安定も、平和も生まれることはありません。

今後向かっていく方向は、人間だけが住みよい持続できる社会を作るのではなく、「生命的な公共」をどのようにして実現するのかを、「生態智」という言葉をキーワードにして考え、それをベースにして人間の世界を点検しながら未来を志向することが必要ではないでしょうか。

そのときに、その理想世界は、大本では「霊主体従」原理に基づくのですが、わたしは「生態智」原理に基づく「平安きょう」の実現と考えます。その「きょう」は昔であれば「平安京」ですが、食べ物の豊かな「平安饗」、そして、歌声が響き、芸術が豊かに表現さ

れる「平安響」。そのような「響」や「響」を内包する平安の里としての「平安郷」の構築と実現。そのためにも先ほど言った、許すこととか、譲ることとか友愛世界の実現が大きな重要な未来の課題になります。もっともこれは、古来の最重要課題の一つでしたが、これまで部分的な達成はできたと思いますが、十全な実現はできていません。

### おわりに～スパイラル史観の観点より

拙著『現代神道論－霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年）や『世直しの思想』（春秋社、2016年）で主張した「スパイラル史観」の観点から言えば、現代は中世のような乱世ですので、これからの時代はますます深刻に争いが深く激しくなっていくと思っています。もちろん、戦乱も増す。だから、戦乱が深くなっていく時代に希望を生み出さねばなりません。中世において能（申楽）を世阿弥が「天下の御祈祷」として確立したように、これからの“Arts of peace”を新たに生み出さねばなりません。中世や戦国時代には、能だけでなく、茶道も華道も生まれました。その大成者の千利休は殺されましたが、お茶というものを通して、あの戦国時代に待庵のような2畳の茶室を使って、戦国の武士たちが刀を外して、躰口から入って、一時の和解と平和を実現した。あの狭い特殊な空間の公共的共有というのは絶対的な信頼がないとできませんね。

そういうものをつくり上げていく安心文化を、中世は工夫して必要に応じて生み出した。戦国時代の激しい争乱期に。そういう新しい Arts of peace の創造の必要を私たちはすでに15年以上前から言い始めていますが、それを着実に実践し、Arts of peace を活用しつつ平和を作り上げていく。古語では、その Arts of peace を「ワザヲギ」と言いました。その新しい「ワザヲギ・Arts of peace」どうやって作つくり上げ、表現していくことができるのか。これが大きな課題になると思います。

私は毎朝、比叡山に向かって法螺貝や石笛やさまざまな横笛などを吹くことから一日を始めているのですが、今日は最後に法螺貝を吹いて活力をもう一回甦らせたいと思います。死と再生ですね。再生せしめて、第2部の有益なディスカッションで、皆さまからさらに有益な提言を受けながら考えを深めていきたいと思っています。

（法螺貝演奏）

ありがとうございました。（講演③終了）

○千葉 鎌田さん、ありがとうございました。

譲り、許しという概念を使って、平和につながる Arts of peace をどうやってつくるか。貴重なお話をありがとうございました。

ここでまた10分ほど休憩させていただきまして、パネルの椅子をそろえたり、いろいろやりますので、その後、フロアとのディスカッションに入りたいと思います。

（休憩）

## パネルディスカッション

○千葉 それでは、時間になりましたので、これからパネルディスカッションです。まずご講演いただいた3人の先生への私からのコメント、質問というかたちで始めさせていただきます。

まず私の方から15分ぐらいでコメントをさせていただきたいと思います。一人5分ぐらいのかたちでということです。

小林さんが『神社と政治』という本を書かれまして、私、先ほど申し上げましたように、大変情報豊かで、神道についていろいろな角度から書かれていまして、大変勉強になりました。

その中で最初に、宗教というのは、一義的な解釈の上に成り立っているものではなくて、かなり多様な解釈がある。現代において、どう解釈し、どう摂取するかというのが、決定的に大事だというご指摘がありました。

結局、こういう宗教の捉え方は、本日の講演を行ってくださった3人の先生方みんなに共通していたように思うのですね。中東における諸宗教の重層的な構造について栗田さんに話を伺いましたし、鎌田さんも、神道の伝統における、許し、譲り、国譲りという伝統を持っている出雲大社系の考え方と、伊勢神宮系の考え方の間の緊張ということについて語っていただきました。

それでは、まず小林さんのお話の方からなのですけれども、現在、神道において、話にもありましたけれど、こんにち日本会議という存在が非常に大きいわけですよね。これは公の宗教を目指しているというか、戦前の国家神道への回帰みたいな傾向がだいぶ見られますし、いまの問題は、安倍政権を支えている閣僚の多くが、あるいは中心的な取り巻きの政治家たちが、この日本会議およびその系列のさまざまな組織の会員でもあるということです。第3次安倍内閣の最初の時期ですけれど、80%を超える閣僚が、日本会議に加わっていたということがありました。

この日本会議は、神道系だけではなくて、仏教関係、それからキリスト教関係から出てきた幕屋のような団体も入っているんですけれど。そのようなかたちで、小林さんの言葉を使えば「公の宗教」、「国家宗教」というような性格を持っている。

他方で、今日の講演で豊かな示唆をもって言われていたのは、神道というのは、多様な系統を持ち、多様な思想や価値が見られるということで、従来、公共哲学をずっとやられてきた立場から、「市民的公共性」「民の公共性」から見て、神道はいろいろな可能性、ポテンシャルを持っているというご指摘がありました。そして、それを開くことによって、神道の中から、平和を、また公共の価値を下から吸い上げていくような可能性もかなりあるということです。

私は、この本には二つの大きな軸があったと思いますが、第一に神道を本質的な観点からいろいろ分析し、読者に豊かな知見と情報を与えてくれているということ。第二にこんにちの公共哲学、あるいは公共性という観点、地球平和公共ネットワークのキーワードで

ございましたけれども、そこから神道に期待すべき点ということで、大変示唆的でありました。

私がもう一つ感心しましたのは、今日のお話にもありましたけども、綱領ですね。

○鎌田 「敬神生活の綱領」ですね。

○千葉 そうです。その綱領は、善き生き方に関する綱領ということで、公共への奉仕、太平へのコミットメントなどの指摘が、この綱領には記されています。

綱領の最初のくだりを引用させていただきますと、「神道は天地悠久の大道であって、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を發揮し、人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である」というようなことで、その下に三つの綱領が書かれています。

「一 神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと。一世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと。一 大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること」

こうした内容をもった綱領が提起されているというのは、われわれにとりましては、新しい貴重な知見だと思うわけですが、このような考え方には、他の多くの宗教や世界観や道徳と共通のものがたくさんあり、現代の喫緊の課題である宗教間対話や宗教間協力につながります。

質問としては、このように現在の神道が二重性を持っている。公の国家宗教的なベクトルと、民の公共を志向する国民的宗教としてのベクトル。この二つがせめぎ合っていると思われるわけで、われわれとしては、後者を重視したいわけですが、そのための動きとして、3・11の東日本大震災がありました。神社やお寺は地元で大変な貢献をしたわけですが、その辺りから、そのような動きとのつながりが、どの程度見えてくるのか。その辺りをお聞きしたいと思います。

次に栗田さんの中東情勢についての歴史のおよび現代的な考察、いろいろと興味深くお聞きしました。冷戦は、ある意味で世界に対して籬（たが）を課していた面がありました。それが外れることによって、中東には新しいリストと可能性が芽生えた。そして2011年の9.11同時多発テロ以降、国際テロ組織アル・カーイダやI Sと米国および有志連合諸国との間に対テロ戦争が戦われるようになりました。

その背景には、やはり第一次大戦後およびそれ以前にさかのぼる英仏を中心にしたヨーロッパ諸国による中東地域の植民地化という問題があり、当時、中近東といわれた地域に入って恣意的な国境の線引きといったことが起こりました。そして、冷戦以降、再植民地化の時代にいま入っていったということです。やはり欧米諸国の植民地主義、あるいは歴史的な中東への帝国主義的な関わり方が、こんにちの中東情勢の背後にあるわけです。

米国と有志連合側の空爆一辺倒の対テロ戦争は問題だらけです。国連がほぼ無作為の状況で、停戦合意を取りつける試みも真剣にやっていない。その結果、対テロ戦争はI Sを中心にしたテロリズムを制御する面と、さらに新たに誤爆を受けた住民の人たち、その家

族や子どもたち、親族などの怨念を買い、テロリストにしてしまうという役割も果たして、空爆一辺倒の戦略の問題性というか、空虚さというものは、多くの国際関係や国際政治の専門家たちも、とくにリベラルの人たちが指摘するところです。

こういう状況の中で、どういう打開の道があり得るのかという問題です。シリアなどは、三つどもえ、あるいはそれ以上の諸勢力が複雑に絡み合いながら戦闘を行っているわけですが、そういう状況下で、停戦合意や対話の気運や試みが、どうやったら構築できるのか、素人目にはこの辺りについて伺ってみたいです。

もう一つは、ISという存在をどう理解したらよいのかという問題です。イスラームには、言い意味でも悪い意味でも、西洋のローマ・カトリシズムの歴史に見られたような異端を取り締まるような公会議や異端審問のような制度があまり見られませんでした。ここにはいい面が多くあったわけですが、しかし欠陥もあるだろうと思います。イスラームを語る勢力が何のチェックを受けずに、イスラーム世界のなかで正当な勢力としてのさばっていくようになるという問題です。これはイスラームでないということをはっきりと指摘する団体がなく、また識者のネットワークもイスラーム内部にないという問題です。イスラームを名乗りつつ、無辜の人びとを集団殺戮する国際テロリズムを聖戦のような概念で正当化するという問題について、どのようにチェックを及ぼしていくのかという問題です。

もう一つは、日本は、こうした中東情勢に対して、平和構築のために何をなすべきかということについてです。もちろん、安倍政権のやり方は問題だらけだのご指摘。これは私も大いに賛同するところです。同時にまた「平和憲法」を軸にしながら、非戦型の安全保障をどのように展開していくべきかという問題とも連動します。

栗田さんの方で、日本がやるべきこととして具体的にこういうことが考えられるし、イスラーム諸国の民衆の視点からは、日本にはこういうことを期待しているというふうなことがあれば、お教えいただきたいと思います。

最後に、鎌田さんの啓発的な、目を覚まされるようなご報告があったわけですが、一つは許しおよび譲りが諸宗教の一つの共通の特徴としてあるというご指摘だったと思います。

復讐の連鎖をやめる力が、本来の宗教には宿っているはずである、と。ですから、他者との共存共生、他者の受け入れですね。それから、敵をも許す、敵を愛する。孔子や孟子の仁や恕、墨子の兼愛や博愛という考え方ですね。仏教の慈悲。こういう価値が諸宗教の根幹にある。これは、鎌田さんが長らく諸宗教を研究されてきた一つの論点であり、根本的な視点であると思います。

しかし、同時に、3人の先生方の指摘にもありましたが、宗教は暴力の原因ともなる、と。こんにち、これが大きな問題ですね。キリスト教の中にも原理主義化ということが起こっていて、イラク戦争を擁護したキリスト教右派、ファンダメンタリストや福音派右派の動きがアメリカにありました。

仏教も、例えば、ミャンマーやスリランカにおいては、排他的な狭いナショナリズムと

結び付くことで、本来は和平や共生や慈悲を中心的価値とするはずの仏教が、長年の民族紛争、対立紛争の要因になってきたということもあります。同様のことがインドのヒンズー原理主義にも見られる。そしてイスラームの一部にも、見てきたように、同様の過激化と暴力化が見られる。

このようなことで、宗教が何らかの逸脱を通じて暴力化する面も持ちながら、宗教の根本と原理は、平和への志向というものを必ずや保持しています。こんにち宗教をこうした両面から見て考えていかないといけない時代だと思うのです。

そうした状況下で、どのような考え方が宗教者に求められているのかということ、鎌田さんから教えていただけたら、ありがたいと思います。

それから、出雲大社系の国譲りですね。オオクニヌシの神の系列。先生は、あれは陰の系統であるというふうに言われましたけども、この系譜の持つ重要さということ、今日のご講演を通して、私もおそらく会場の方々も、印象づけられました。

同時にまた、伊勢神宮系といいますか、最も目立つようなところにおいては、いまだに国家神道的な残滓も見られるというなかで、日本会議がこの系譜に連なる面が強く、同時にまた、神の国教をさらに展開する可能性もあるわけです。両方の可能性を見据えながら、神道がこのようなかたちで、3・11東日本大震災のときに果たしたような役割を考えますと、こうした動きをどうやって定着させていったらいいのか。この辺りも教えてほしいです。

そして、他の諸宗教が、仏教、キリスト教も含め、協力し合って、そういう可能性を広げていったらよいのかということに私は関心があるのですが、その辺りに何かご意見を頂戴できればありがたいなと思います。

以上が私のコメントと質問ということで、3人の先生方から応答やコメントなど、もしあればお願いしたいと思います。

○小林 では、私からお答えします。先ほどの私のお話では、スライドの最後の部分は使わなかったんですけども、いまの先生の質問に対する答えとして、だいたいそこが相当します。それをご覧になりながら見ていただければありがたいです。

総括として、「国家神道から民間へ」というふうにスライドにありますね。いまの近代的な「憲法」と国家神道との間に緊張関係があって、神社は戦後に半ば強制的に民間になったので、国家神道そのものに戻そうとするわけではないものの、ある程度は戦前のように戻したいという志向があって、政治運動が行われてきたという側面があるわけです。

私が先ほど申し上げたのは、民の立場になった上で、なんとか公共性を回復しようとして行ってきたさまざまな活動の中で、今の「憲法」を前提として行われてきた部分に関しては、今後むしろ逆に生かせる部分もあるのではないかということです。

そして、鎌田先生のお話にあったような出雲系の運動がいま注目されて、「立て直し」という素晴らしい壮大なビジョンは、非常に公共や平和に寄与すると私も思うのですけれど

も、それ以外の中核にある伊勢系の考え方も含めて新しい平和を築いていくためにどうすればいいかという可能性を示唆したいという気持ちで、「国民の神道」という表現を用いたのです。

いま千葉先生から、「3・11以来に着目するものは」というご質問だったんですけども、3・11以来、東北の人たちのスピリチュアリティを感じさせるような出来事があり、宗教者の新しい活動も生まれ、「平和とスピリチュアリティ」という私たちの問題提起にとって非常に重要な新しい段階に来たと思っています。さらにそれに続いて、先日の天皇陛下のメッセージは、新しいポイントになるのではないかと考えています。

本では、まつりごと、つまり政治ないし祭事に関して述べていて、陛下のメッセージはそれと深く関連しています。あのメッセージそのものは、ちょうど後書きを書く直前に出たので、後書きに少しだけ関連をふれたのです。「まつりごと」とは祭政一致を意味するという考え方が「国体」の考え方には強く、それが戦前の憲法や、今の改憲論へとつながっています。これに対して、それとは異なった解釈もあるのです。「まつりごと」とは「奉仕事」という意味であって、政治でも祭事でも奉仕することが「まつりごと」です。「まつりごと」は「祭務一致」を意味していて、同一人物が「政治」と「祭事」を行う必要はなく、政治と祭事は分かれていても、それぞれの領域で真剣にその人の職務、つまり「務め」を果たして奉仕することが「まつりごと」の本義であると考えられるのです。

天皇陛下のメッセージは、戦後「憲法」の下で天皇陛下が一生懸命されてきた「務め」についての考え方を集約されたものなので、とても貴重です。その「お務め」の考え方は、「奉仕事」としての「まつりごと」にちょうど相当するからです。

現「憲法」の中では、天皇は、国家の象徴と国民の統合の象徴であるとされています。国事行為は、首相任命や法律などの公布、大臣などの任免認証、国会招集、栄典授与などですから、国家の象徴としての役割と考えられます。これに対して、国民の統合の象徴の方は、「憲法」上は具体的な役割があまり規定されていないと思うのです。そこで国民統合の象徴としての行動として天皇陛下がご自身で考えて務めてこられたのが、被災地の見舞い、外国訪問、茶会などであると考えられると思うのです。憲法学の通説では「象徴としての地位」に基づく公的行為であるとされていますが、私の言葉では「公共的行為」です。そのような象徴天皇の行動は、「民の統合の象徴としての公共的行為」と思うのです。

いま千葉先生が言われた、神社本庁が定めた「善き生活」は「敬神生活の綱領」で、その第3項の中に「大御心」という言葉があります。私の本では、それについて問題提起をしています。つまり、大御心は天皇の心ということですが、その天皇の心を意識して、善い生活を送るべき、ということになっているのです。

その天皇の心は、今の天皇陛下の心であると同時に、皇祖皇宗、つまり天照大神以来の歴代天皇の心を踏まえているということになっています。最近注目されている日本会議などの人たちは、その「大御心」を先ほど言った古代の国家神道や明治の「憲法」体制のようなイメージで捉えて、その方向に日本の国家を戻そうという運動をしているようです。

それに対して、いまの天皇陛下の場合は同じく神道の伝統を踏まえつつも、戦後「憲法」や象徴天皇という立場を前提にして、あのようなメッセージを出された。このときに、天皇の本当の「大御心」はどちらなのか。これは大きな論点ですね。

具体的な政治に関しては、いま「生前退位を認めるか認めないか、認めるならどういう法律にするのか」というのが大論点ですけれども、それだけではなくて、「憲法」との関係における天皇の在り方について、とても大きな問題提起があつたメッセージでなされている。

私は、このメッセージは、国家神道ではなく「国民の神道」の中核になり得ると思います。つまり、民主主義とか、国民主権とか政教分離を前提にした上での天皇の在り方ですね。あのメッセージをしっかりと国民が考えて議論することによって、これを明確にすることが可能になるのではないかと考えているんです。

その意味では、いま「平和憲法」が揺らいでいますけれども、このメッセージを今後しっかり議論していくことによって、再確立していく可能性が出てくるのではないかと考えて、ちょうどいいタイミングで、この本を出せたと思います。

ただ、メッセージとの関係は本には明確には書いていないので、今後、公共的に発信していきたいと思います。天皇陛下のメッセージが定着して「国民の神道」ができれば、アメリカの市民宗教に対応するような日本の市民宗教、つまり、民主主義とか政教分離を前提にした政治の宗教的次元となりうるのではないかと。天皇陛下は「祈り」という言葉を使われていますが、神道だけではなくて、他宗教との協力を含めたスピリチュアルの次元が政治の基礎になり得るといふ可能性が開けてくるのではないかと。そういうことを考えて、本の議論の中心は神道ですけども、仏教やキリスト教徒の関係も書いたのですね。

天皇の歴史的な祈りは、べつに神道だけではなくて、仏教等も含めて行われてきたので、「明治憲法」以後の神社や神道だけではなくて、先ほどお話しした歴史の流れをもう一度振り返り、新しい時代における在り方を構成するという可能性も考えてみるのが重要ではないかと考えております。

#### ○栗田

千葉先生、大事なコメントありがとうございました。どれだけお答えできるかわかりませんが、最初に、この間の中東の混乱の背景に歴史的に見れば欧米の植民地化があるし、それから、冷戦終結後には「再植民地化」の動き、アメリカ主導の中東戦争があることは分つたが、それをどう克服していけばいいのかというご質問だったと思います。

基本的に私も、空爆をするとまた潜在的にテロの予備軍になりかねない人も増えるという悪循環を繰り返しているように見えるので、非常に絶望的にもなるんですが、一方で、湾岸戦争のときといまを比べると、世界の人々も「学習」してきている、という側面があるとも感じるんですね。

湾岸戦争のとき、アメリカのブッシュ大統領（父）がサダム・フサインの暴挙から国際秩序を守るんだと言って軍事介入に乗り出した際の世界の受けとめ方と、息子のブッシュ

の代になって2003年にイラク戦争を始めた際の世界の受けとめ方とは違ってきているわけです。

湾岸危機、それを受けての91年の湾岸戦争のときには、ブッシュによる誘導に世界もだまされてしまって、「冷戦崩壊後の新しい状況に国際社会も共同で対処しなければいけないのかもしれない」といった空気が作り出されました。それを反映して湾岸戦争のときは、国連安保理で、イラクへの武力行使を容認するとの解釈が可能な決議（そうではないという解釈もあります）が出されるということも起きたわけです。

これに対し2003年のイラク戦争のときになってみると、やはりその10年間で国際社会が「学習」していて、結局、湾岸戦争はアメリカのための戦争だったのではないか、冷戦後に中東にアメリカが介入して、アメリカ中心の経済・政治・軍事秩序をつくっていくための戦争、中東の石油狙いの戦争だったのではないかという認識が実は広がっていた。

結果として、2003年にいわゆる「大量兵器疑惑」等を口実にブッシュ（子）が戦争に突き進んだときには、国際世論はずいぶん慎重で、国連安保理でも武力行使容認決議は出ませんでしたし、そのため「多国籍軍」には至らず、アメリカはイギリス、スペイン等、一握りの国の「有志連合」というかたちで戦争に突入せざるを得なくなりました。

しかも、大変な反戦運動が起きましたよね。欧州の諸都市でも、アメリカでも、日本でも。かなり大規模なデモが行われて、戦争が起きる前から、「この戦争に突き進むべきではない」「違法な戦争だ」という運動が起きました。

そして最近の、「集団的自衛権」行使容認反対運動とか安保法案の反対運動をやっている人に聞くと、結局、あのイラク戦争に対する反戦デモのあたりから、一般市民もデモに繰り出すという文化が形成されてきた、と語ってくれたりします。

○千葉 われわれも出ましたけどね。

○栗田 行きましたよね。そういった意味では、世界の民衆も学習してきている。特に、中東に戦争を仕掛ける側に巻き込まれがちな先進諸国の市民も確実に学んできていて、いくら正義のためだとか国際秩序を守るためだとか言っても、実際はその背後に石油や、軍需産業の利益という後ろ暗いものがあるんじゃないかと気づき始めている。どんな名目であれ、戦争を簡単に支持してしまっただけじゃないかという意識が確実に強まってきたのではないかと思います。

冷戦終結後、最初はアメリカの思うままに戦争をやっていたのに、だんだんアメリカが一方的に戦争ができない状況になってきていて、オバマ政権にしても、実はアメリカ国内のイラク反戦の気運を背景に成立したわけですね。アメリカ国民がブッシュ・ジュニア時代のネオコン路線を反省し、イラク戦争は間違いだったのではないかと感じ始めた、イラク反戦気運とも言うべきものを背景にオバマは出てきましたし、イギリスでもブレア首相が退陣するし、先進諸国でもそうしたかたちでイラク戦争の検証が行われ始めていて、やっていないのは日本ぐらいなものです。小泉政権や、それを継承する安倍政権が、いまだに堂々と大手を振って世をわたっているというのは日本ぐらいです。

このように世界的には、やはり中東等に大国主導の戦争を仕掛けているのはまずいという、戦争に反対する市民の意識が確実に育ってきているということも言えると思います。

2点目の、いわゆる「イスラーム主義」的な動きとか、あるいはI Sとか、そういったものをどう克服していくかということなんですが、まず確認しておきたいのは、既に述べたようにI Sとかその前のアル・カーイダ等の組織は、基本的に先進諸国によって必要とされていて、先進諸国の中東介入の名目を提供する存在であるわけです。

言うまでもないことですが、「対テロ戦争」は当然のことながら、その前提として、まず「テロ」を必要とするわけです。「9・11」事件が起きたからこそ、さあ、これを抑えなければ、テロとの戦いだといって、アフガニスタンやイラクにアメリカが攻めていくことが可能になりました。

また、先に述べたようにI Sが特に注目され始めたのは2013年半ばぐらいですけど、それによって、それまで、2011年以降、「アラブの春」で激動する中東に介入したくてもなかなか大規模な介入はできなかった欧米が、とうとう直接中東に再度介入することが可能になったわけです。2013年頃から特にシリア・イラクでI Sが台頭し、パルミラ等の遺跡を破壊し始めたり、女性を奴隷化したり、欧米人の人質を惨殺したり、残虐非道なことをこれでもかとやって、それによって結局、こんなことを許していいのか、と言ってアメリカやEU諸国が空爆することが可能になっているわけですね。

なので、「陰謀論」と揶揄されるかもしれませんが、巨視的に見た場合、テロがあって初めて対テロ戦争が起こせるという関係になっており、支え合いの関係は確実に存在する。実際に、やはりI Sの台頭を支えた国際的な資金や人の流れを見ていくと、国際的情報機関がどこかで関わっていただろうということは、いまは広く指摘されています。

そして、日本や欧米のマスコミではI Sは中東が生み出したものだと思っているけれど、実際に中東の人たちにI Sをどう思うか、(アラビア語ではal-Dawla al-Islamiya fi Iraq wa al-Sham、「シリアとイラクにおけるイスラーム国家」というのを略してDaishというんですけど)「Daishをどう思うか」と聞くと、だいたい人は吐き捨てるように、「あれは国際情報機関がつくったものだ」と言いますね。中東の人びとは、I Sが自分たちの中から出てきたものだとは夢にも思っておらず、多くの方はだいたいあんなものはイスラームと何の関係もないとっていて、「欧米やイスラエルの情報機関がつくったんだろう」と思っている、という状況が現実にあります。

もちろん、これはあまりにも単純過ぎて、実際には情報機関がつくった部分もあるにしても、それにシリアとかイラクの民衆の一部、特に青年が引き寄せられていった面もあるので、「欧米がすべて作った」というのは言いすぎです。ただ、お金や人の流れ、誰が人員を訓練してきたのか、等を見ていくと、やはり欧米諸国の責任が結構あるんですね。

なので、いまのI Sの行動をどう封じ込めていくかというときに大事なものは、即物的ですけど、お金や人の流れを断ち切る。それも、実は欧米が放置している面があるので、そこをきちんと警察的な手段で封じていく、軍事行動ではなく、ふつうに法の枠内で取り締

まっていくなことが大事です。

ただ、いくら I S が国際諜報機関によって作られたものであるにせよ、やはりそこに引き寄せられていく中東の一部の民衆がいることは確かでしょう。その背景にはやはり貧困であったり、欧米の侵略に対する不満といった要因がある場合もあると思います。

では、その部分をどう絶っていくのかということについていえば、私は楽観的すぎるのかもしれませんが、端的に言ってしまえば、まさに 2011 年にチュニジアやエジプトで成功した中東革命のような内側からの本当の民主化、民衆が独裁政権を倒して、本当に自分たちの手に政治を取り戻したという実感が湧く瞬間、2011 年革命は封じ込まれてしまいましたが、ああいう動きは、長い目で見れば、中東でまた必ず起きてくると思うんですね。

そのときには、I S とかアル・カーイダみたいなものは民衆にとってまったく魅力を失ってしまって、太陽に光を前にした雪みたいに消えていくだろう、と私は思っています。人びとにとって I S に入ったりするより、街頭に出て自分たちがデモをする、労働組合に入る、学生運動をやるという方が楽しくなってくるので、ああいう組織に入るということとはなくなってくると思います。

ヨーロッパ現代史家の荒井信一先生という方が、たしかどこかで書いていらっしやったんですが、第一次世界大戦末期、ドイツの精神病院は患者であふれかえっていた。戦時中は、いわゆる「シェル・ショック」というのか、戦場体験のトラウマでメンタルヘルスを傷つけられた人が多く、精神病院はいっぱいだったらしいですね。ところが第 1 次大戦が終わって、ドイツ革命が起きた瞬間に、みんな退院して行ってしまった。戦争が終わり、革命が始まると、戦争を起こしたカイザーを倒して共和国革命をするという、そちらに参加しに行ってしまったので、患者さんはみんないなくなったというんです。

○千葉 PTSD が消えてしまった、と。

○栗田 そうなのです。だから、中東の場合も、I S とか、「イスラーム主義」運動の影響力を消滅させる最大の特効薬は、真に大衆的で巨大な民主化革命がもう一度起きることかもしれません。それにみんなが参加していくようになれば、ああいうゆがんだかたちでの宗教の政治利用に引き込まれる人というのは、いなくなっていくのではないかと思います。

3 点目に、日本は平和のために何をすべきか。I S とかに構っている場合ではなくて、むしろ日本で安倍政権をちゃんと止めて、「平和憲法」の原点に戻ることが大事だと言ったんですが、千葉先生からはやはりそれだけでは現実の動きになかなかない、そういう中で何をしたらよいだろうかという提起がありました。

たしかにおととしは「集団的自衛権」行使容認の閣議決定がされ、去年はとうとう「安保法」が強行されるという大変深刻な状況ですが、一方で国会前の大デモがあり、特にその中で若い人たちが声を上げ始めている、そういった新しい動きも出てきています。

「憲法」についても、従来の、正しい「憲法」、いいことを言っている「憲法」なんだけど、攻撃されていて、受け身でやられっぱなしみたいな状況から、去年あたりから逆に一

種、戦うための武器として捉え直す動きが強まっている。むしろ「憲法」こそが最大の武器だという、そういう捉え方が出てきているのではないかと感じたりしています。

具体的には、例えば、SEALDsの中心的なメンバーの一人だった奥田愛基さんがたしか、「自分たちは、革命を起こせとか、体制を転覆しろとか言っているわけじゃなくて、憲法を守れと言っているだけだ」と、すごくさらっと言っていたのが印象に残っています。

「革命を起こせと言っているわけじゃない」という言葉からは、このごろの若者は「革命」という言葉に忌避感があるのかなど、私にとっては、それは気になる点でもあるのですが、ただ、自分たちは単に「憲法」を守れと言っているだけだ、というすごくさらっとした言い方には、逆に「憲法」を守らない政治家は退陣しろ、という明確なメッセージも込められているわけですね。

「守れ」というのも、この場合、弱々しくやられっぱなしになっている憲法を守ってあげようというのではなくて、単に交通ルールを「守れ」というのと同じ意味です。首相だったら、現行の日本国憲法を守るのが当たり前だ、立憲政治だったら、憲法を守るのが当たり前で、それが守れない政治家は退陣しろという、ただそれだけのことなのですが、逆にすごく強いメッセージでもある。

国会前のデモでも、「安倍はやメロ」「戦争反対」というスローガンと同時に、「憲法知らない首相は要らない」といったスローガンも叫ばれていました。若者たちは「憲法」というのはこれを守れという最低限のルールだ、それを守らない政治家は退陣しろ、と求めている。武器として「平和憲法」が新しく見直されているという、そういう局面に入っているという気がします。

それに関連して、今日の報告のなかで触れたいと思いながら、時間がなくて言えなかったことを、一つだけ補足させてください。

それは「平和憲法」の世界史的意義についてです。現在、日本国憲法をめぐる状況は非常に危機的ですが、ここでわれわれがあきらめてしまっているのか、この憲法を変えられるということをむざむざと見過ごしてしまっているのか、と考えるとき、私は、日本国憲法は実は日本人だけのものではない、ということ意識する必要があると思っています。

日本国憲法を守ることは、戦争で死んだ全ての人々、東京大空襲だったり、沖縄戦だったり、広島・長崎で原爆の犠牲となった全ての人に対する義務であると同時に、日本が侵略した朝鮮半島とか中国大陸の人たちに対する義務でもある。

そういう意味では、日本人の気が変わったから変えていいものではなく、アジアの人たちに対する日本の侵略戦争や植民地化に対する反省を踏まえた憲法、アジアに対する義務でもあるから、日本国民だけの都合だけで変えていいものではないと思うんですね。

また、私の専門は歴史学なので、歴史的にさかのぼっていくと、日本国憲法は、もちろん直接的には日本国民の第二次大戦への反省を踏まえて制定されたものですが、憲法の平和主義の背景には20世紀前半、特に第1次大戦後の欧米で生まれた「戦争の違法化」という普遍的な考え方があって、それが最終的に日本国憲法にも流れ込んでいるわけです。

第2次大戦の戦争体験を踏まえた日本国民の反戦感情に加えて、20世紀前半に第1次大戦、非常に悲惨な世界大戦というものを初めて味わった欧米の市民の間で生まれた、戦争の違法化運動の系譜も流れ込んでいる。

ただ、最近調べていて面白いなと思ったのは、そういう欧米の反戦運動も、第1次大戦期に初めて始まったわけではなくて、大戦開始以前、19世紀末～20世紀初頭にも、このまま先進諸国が中東やアフリカで分割競争を繰り返すと、それは世界大戦になって、そこでは、資本家だけではなくて労働者の子弟が、資本の利益のために戦争に投げ込まれて犠牲になるんだという危機感が強まり、反戦の運動は起こり始めているわけです。

その背景をさらに見ていくと、こうした欧米での反戦運動というのは、必ずしも欧米の市民が自発的に、「戦争はいけない」という抽象論として始めたわけではなくて、原動力は19世紀末にイギリスやフランスがやっていた戦争、特に中東に対する軍事介入の過程で中東の民衆の批判や抵抗に遭遇したことなのですね。

イギリスによるエジプト占領だったり、その後背地のスーダン介入だったり、あるいはスーダン南部、いまの南スーダンでイギリスとフランスが1898年に、ファシヨダ事件といって、イギリスはアフリカ縦断政策、フランスはアフリカ横断政策を追求していたら、南スーダンでぶつかってしまうという事件があったりしたわけですが、こうした中東・アフリカに対する戦争の具体例や、それに対する現地の民衆の抵抗に学ぶ中から、侵略戦争や植民地支配に対する反省や、反戦運動が起きてくるという経過をたどっているのです。

このように見ていくと、日本国憲法に結実している平和主義、「戦争の違法化」といった考え方の背景には、19世紀にイギリスやフランスがさんざん中東やアフリカ、あるいはそれ以前に中国やインド、いろんなところで侵略戦争をやって、そこで犠牲になった、中東やアフリカ、アジアの人がいるわけですね。そういう人たちの血が全部流れ込んだ上で、いまの世界における平和主義というものが生まれている。

そういう意味では、日本国憲法の平和主義というのは、日本人だけのものではなく、日本が侵略したアジアの人たちに対する責務でもあるし、さらには19世紀以来のヨーロッパ、欧米による植民地化の過程で犠牲になった全ての人の血によって贖われ、勝ちとられたものだと言うことができます。日本の都合だけで変えてしまってもいいものではない。そういうふうな目で憲法を見直すことも大事だと思っています。長くなり、申し訳ありません。

○千葉 ありがとうございます。

○鎌田 千葉さんの質問の一つは、どのような見方が宗教者に求められているのか、宗教的暴力に向かうものと、宗教的な公共というか、平和に向かうものの二つがある中で、宗教者には何が求められているかというのが、一つ目の質問ですね？

○千葉 はい。

○鎌田 二つ目は、具体的には何ですか？

○千葉 二つ目はですね、神道の出雲大社系、それを生かすような仕方で、諸宗教がそれ

に参加しながら、宗教間対話、宗教間協力をどうやって進めていったらよいのか。もうそういう動きはあると思いますけれども。

○鎌田 まず、今しがた栗田さんが「平和憲法」の世界史的意義について言ってくれたので、私たちの立場を先に述べます。

私たちはNPO法人東京自由大学という市民大学を始めて18・9年になります。その東京自由大学の顧問になってくれた一人が山尾三省という、屋久島に住んでいる詩人で、2001年8月28日に亡くなりました。その2週間後に、9・11のニューヨーク同時多発テロ事件が起こったわけです。

その詩人の山尾三省（1938 - 2001）さんは神田生まれですが、屋久島で農をしながら詩作を続け、晴耕雨読の自給自足的な生活をしていました。62歳で若くしてがんで亡くなったんですが、彼が亡くなる直前に三つの遺言を書いた。

その一つが「僕の生まれ故郷の、東京・神田川の水を、もう一度飲める水に再生したい」というものです。二つ目が「この世界から原発および同様のエネルギー出力装置をすっかり取り外してほしい」。三つ目は「南無浄瑠璃光・われらの人の内なる薬師如来。われらの日本国憲法の第9条をして、世界の全ての国々の憲法第9条に組み込まさせ給え。武力と戦争の永久放棄をして、すべての国々のすべての人々の暮らしの基礎となさしめ給え。」です。この三つの遺言を山尾三省は遺しました。

私たちは、根本的に山尾三省さんの趣旨に賛成しているので、NPO法人東京自由大学では「三省祭り」という、山尾三省さんの思想や運動や理念をもう一回顕彰・検証し、称えながら、それをどういうふうに引き継いでいくことができるのかをやってきたんです。そして、「三省祭り」というかたちでシンポジウムとか、詩の朗読会とかをやってきました。もちろんそれは政治運動でもなく、小さな顕彰の祭りに過ぎなかったのですが。

ともあれ、このような次第なので、「平和憲法」の世界史的意義というのは、私にとっても、東京自由大学のメンバーにとっても、とても重要な未来志向的で普遍的な問題なのです。この点においては、このシンポジウムの発表者や司会者の4人ともに同じような考え方や立場を取っていると認識しています。そして、それぞれのスタンスや立場、状況の中で、それを深めていく機会をどう作っていくかということに取り組んできていると思います。

私の場合は、具体的にいいますと、神道神話や神学や日本宗教史の中で、出雲や大本の問題を考え抜く中で、平和や和がほしいというかたちで実現し得るのかを深めていきたいいつも考えています。

それを前提に、千葉さんの質問の第1点にお答えします。暴力が横行する時代状況の中で何ができるかというのは、本当に答えがないんですよ。

ガンディーのことをよく考えるんですが、ガンディーは、みんなが神の子、ハリジャンと主張しました。神は、宗教的な教団、教派、教義を超える、宇宙的な世界真理で、その世界真理をみんなが共有することができるはずだ。その世界真理の共有の中で、各宗教の

教義をや立場を超えて、われわれがつながれる、協働で連携・連帯していくことができる  
と考えた。ガンディーの信仰はそういうヒンズー教だったわけですね。

私の考える神道は、ガンディーのその主張とよく似ています。ガンディー的神道という  
とおこがましいですが。しかしながら、いうまでもなく、多くのヒンズー教徒の中には、  
ナショナリスティックなヒンズー教徒もいますし、神道においても同様です。むしろ、そ  
の方がメジャーかもしれません。そして、その一部の人は非常に先鋭化し、過激な原  
理主義に行きますよね。

そのガンディーの宗教融和策は、ヒンズー教原理主義者には非常に不評だった。インド  
は戦争が終わった後、独立することができた。しかし、独立した後、宗教的な対立と反目  
が激化します。イスラムとヒンズー教が激突して、互いに殺し合う。激しい対立と対決が  
起こった。

共通の敵。つまり、イギリスという共通の敵がいるときには、彼らは仲良くできた。と  
にかくインドの独立を最優先しなければいけないから。そこでは、イスラムとかヒンズー  
とかと言っている場合ではない。とにかくインド独立が先決だということで結び付くことが  
できた。けれども、独立した後は、それぞれの宗教的な立場や信念が前景化して表に出て  
くるので、そこで激しくぶつかった。国民会議派も、そういう中で一枚岩ではありません  
から、いろんな意見があちこちで出てくるという混乱と混沌が起こります。

そうしたときにガンディーは、宗教や神の名の下で殺し合いをするのをやめさせたいと  
願う。対立をやめさせたいので、彼は最後に断食に入って、1週間断食した。すると、み  
んながガンディーの願いを思って、武器を捨てた。こうして、みんなが武器を捨てたと思  
ったので、断食をやめて出てきたところを銃弾で撃たれたんですよね。

そして、最後に一言、「おお、ラーマ」（「おお、神よ」）と言って死んでいった。それが  
ガンディーの最期でした。享年 78 歳でした。ともかく、そのガンディーの最期の場面が、  
今の問題に対する一つの事例というか、アクションだったと思うんですね。

実際に宗教家ができる究極の行為です。ガンディーは法律家（弁護士）であり、宗教家  
であり、政治活動家、社会活動家ですが、彼の中には本質的に宗教がありました。だから、  
その宗教的本質の中で、彼の政治活動や社会活動も支えられていた。

そのガンディーが身を捨てて、断食という、ある意味で宗教的な行為であり、政治的な  
インパクトも持つ行為をして、みんなが武器を捨てたと思った瞬間に武器で撃たれるとい  
うようなことが繰り返し起こるということが、ガンディーが教えた現実の姿だと思うんで  
すよ。私たちがいくら理想を語り、かつ理想的な行為を实践したとしても、必ずそれは起  
こり得ると思います。

起こり得るけれども、われわれの希望は消えないし、消えてはならないと思います。実  
際、ガンディーの精神は、ガンディーが死んだから全て途絶えたかということ、そうではな  
かった。その後、アメリカのマーチン・ルーサー・キング牧師に引き継がれたし、チベッ  
トのダライ・ラマ四世にも引き継がれたし、私たちの多くの社会運動や活動の中に引き

継がれ非暴力主義の思想性がどんな意義を持つのかをそれぞれがさらに深く問い掛けています。

ですので、宗教家の役割は、自分の宗教性にに基づきながら——その自分の宗教性というのは、教義とか教団という意味ではなくて、自分が向き合う宗教的な真理やそこから生じる行為とかですが——、そういうおのれの宗教性に根ざしながら、そこでできる最善の行為を常に臨機応変に、その都度その都度行なっていくしかない。こういうものがマニュアルとしてあります、必要ですよ、というものはない。そういう状況の中にあると思います。

私がいつも座右の銘にしているのは、『古事記』や『旧約聖書』や『スッタニパータ』などです。さまざまな宗教テキスト、古典のテキストは、知恵の宝庫だと思います。私は特に『旧約聖書』が好きなので、本当によく読むんですよ。

『旧約聖書』は、戦いの連続なんですよ。神の罰や、神に対する離反から起こってくる複雑な問題が、暴力と悪が横行する中で、せめぎ合い、さまざまな祈りや願いや神に向き合う心がどんどんシリアスに深まっていくプロセスがあります。そういう『旧約聖書』の持つ世界の豊かさ、面白さは、宗教の醍醐味だと思います。

二つ目の問いになりますが、『旧約聖書』の世界と神道の世界は、ちょっと似ているんですよ。『旧約』にある「唯一なる神」の信仰は、もちろん同じではありません。それは、「八百万（やおよろず）の神々」の世界とは対極です。神観だけを見れば。

しかし、神と人間との関係が、愛と憎悪、嫉妬だとか、憎しみだとか、情念的な熱気を含みながら歴史に介入して、歴史的な世界を作り上げていくという非常に生々しいドラマチックな出来事の世界が共通します。日本の神話の中でもっとも生々しいドラマチックな存在が、スサノヲノミコトと大国主神の存在とその関係ですね。

スサノヲノミコトは、暴力の体現者。一番粗暴な、野性的で暴力的な神で、その暴力的な神が、自分の力をチェンジし、身心変容できた時、ヤマタノオロチという怪物を退治して、歌を歌うことができた。

だから、宗教家にできることの最大のことは、自分の中にある暴力をどこまで変容させることができるのかで、それが常に課題だと思うんですね。なぜガンディーが菜食になり、非暴力的無抵抗主義になったかといえば、自分の中に、あるいは自分の関係の中に起こる暴力をどうやって超えるのかということを、常に彼の神との対話の中で問い詰めていったからだだと思います。

スサノヲノミコトは、荒ぶる暴力性を和魂に転換して歌を歌うという業を行ったんですが、大国主神は、その真逆で、もっとも暴力から遠い神です。世界一ひ弱な優男神というか、一番弱っちい存在なんですよ。兄弟の中で一番弱っちいからいじめられて、全部荷物を背負わされて、お兄さんたちの持ち物を全部背負って、その中で因幡の白ウサギを助けるという、本当に暴力から一番遠い存在です。そして、もっとも手ひどい暴力を受け続けてきた存在なんですよ。大国主神は二回も殺害されるという大変な暴力を受け続けて、母神などの周りの女神の力で再生していったんです。

ここで考えさせられるのは、一番ひ弱なものこそ一番強いという逆説です。そういう側面がやっぱりある。その一番弱いもの、これはキリストもそうだと思うんだけど、イエス・キリストは、この世で一番弱い存在のように描かれているというか、そういう最弱と最強の逆転構造の中にあると思うんですね。

神の子なのに、一番低い、犯罪者として処刑される。そのような最弱者として現れ、そこから超越的な最強者として甦っていく力は、イエス・キリストと大国主神の存在構造の中にある本質です。「最弱こそ最強である」という。

日本の「平和憲法」9条も、そういう側面を持っていると思うんです。最弱こそ、世界最強のものなんだという精神性です。それは、逆転した霊性ですね。そういう逆説の真理性が大国主神には見られるのです。

その大国主神的な、戦いを単に妥協策で回避するのではなく、本質的な関係の持続的な構築がどのようにして可能なのか。自分が自分の意見で「嫌だ、ノー」を突きつけたら対決になる。戦いになる。では、「ノー」を言わないで、みんなが納得する道は、いったいどのようにしてあるのか。

ある意味では、今風に言えば、説明責任を放棄しているような神ですね、大国主神は。自己責任がない。というのも、「国譲り」の結論を子どもの神々に言わせるんですから。一番ずるいと言えますよね。でも、一番ずるいように見えて、共存と合意形成を対決を回避しながら生み出した。まさにそれは、「紛争解決の心理学」の実践でした。

この時、大国主神の長男の事代主神は、状況を察知して、「はい、奉ります」と言って、天孫に政権交代することを認めた。向こう側が強いから。だけど、弟の建御名方神は「嫌だ」と言って、反抗して戦いを挑んだ。しかし、結果的には、相手の建御雷神の方が建御名方神を上回るもの凄い力を持っていたので、「ううん、しょうがない、私はここから出ません」と降参して、諏訪に閉じ籠った。

こういう事態にならないと、納得というか、本当の平和も生まれえないという点では、すごく深い知恵なのか、それとも単にひ弱なのか、いろいろな深読みを含めて、もの凄く考えさせられるんですよ。この大国主神の在り方や生き方や行動や物語というのは、それぐらい謎めいた行為に見えます。

『日本書紀』と『古事記』では描き方が違うのですが、「国譲り」に関してきちんと子どもの意見を聞いたという話は、『古事記』にしか載せられていないんですね。その『古事記』を担ったのは女性たちです、間違いなく。『古事記』の伝承を説いて、それを伝えていった人たちは女性なので、女性の持っている伝承の中にある平和を生み出す象徴構造が出雲神話、特に、大国主神の物語の中に込められているように思います。そこには、「最弱のものこそ最強のものなり」という生命哲学があると思うんですよ。

そこにおける公共観。最弱と最強というと、誤解を生みやすい変な言い方かもしれませんが、弱さの中にある強靱なものをどうやってわれわれが実現できるのかという問題が出雲的な課題だと思います。

○千葉 鎌田さん、ありがとうございます。深い、刺激的なコメントを感謝いたします。

ちょっとパーソナルな、ちょっと失礼な質問です。鎌田さんは折口信夫の人類教を継いでおられる、地球的神道、地球的宗教、地球的新宗教、世界的国譲りということをおっしゃっているわけなんですけれども、神道の世界の中では、大変マイノリティなんじゃないか、と。

○鎌田 懲りずに・・・。

○千葉 國學院時代から受難を受けてきたわけですよね。

○鎌田 そうですね。受難の歴史ですね。

○千葉 そして、受難が少し減ってきたのか、支持者が増えて少しは楽になったのか、受難はまだまだ続いているのか。

○鎌田 受難は続いているんでしょうね。

ともかく、いずれにせよ、大国主神も受難の歴史なんですよ。その大国主神の前で神道研究を誓った私にとっては、受難の歴史は、ある種、正統な伝統ではあるんですよね。でも、一番大事なことは何かというと、受難の中で、本当に平和や持続ができる道を探ったことが、大国主神の凄みだと思うんですよね。

その霊統につながる大本も2回弾圧を受けたわけですね。ある意味で、日本の宗教教団の中で最悪の受難を受けた教団が大本です。ダイナマイトで神殿を破壊されたし、出口王仁三郎の婿養子は厳しい拷問を受けて、精神的に追い詰められた。

そして、晩年に出口王仁三郎は「耀盃」と呼ばれる陶器を焼いて、世界平和のために美の世界を提示した。戦後、大本が賠償金などを取らずに芸術と世界平和の実現を徹底して行こうとしたかを考えると、大国主神的な出雲の受難の歴史を近代日本宗教の実例の中で実践モデルを提示したのが出口王仁三郎の行為であったといえます。

その出口王仁三郎が最後に行った“Arts of peace”的な芸術的行為によって平和な世の中を作るという遺志が受け継がれて、MOA美術館やミホミュージアムなどになってきているのです。

そのかたちや中身の实態についてはいろいろな受け止め方や意見があるかもしれませんが、出口王仁三郎の理念や理想は、ガンディーの思想と同様に、日本における無抵抗的な不服従の平和創造への道の伝道だったといえます。それは単なる反抗でもなく服従でもない、不服従的な平和創造なんですよ。大国主神がそうであるように。そういう逆説的な平和実現がどうやってできるのか。その辺のところは、私も受難の渦中にあるので・・・

よく考えてみれば、変ですよ。日本思想や日本文化や神道の研究者の私が上智大学グリーンケア研究所にいるなんていうのは。この構造だけでも受難的ではないでしょうか。でもそれは、ポジティブな受難だと思いますけれども。今は、そういう逆説を必要としているのではないのでしょうか。

○千葉 ありがとうございます。

○栗田 自分の質問への答えだけで精一杯で、さっき言えなかったんですけど、小林先生

や鎌田先生に是非伺ってみたい点が二、三ありますので、フロアにお渡しする前にお答え頂けるでしょうか。

一つは、小林先生に対する質問とコメントです。今年あたりから、初詣に行くと神社で改憲賛成署名をやっているなどという事態がある中で、小林先生は、一方で危険な動きにつながる可能性もあるけれど、他方で神道が公共性に目覚めるというか、もう一度、公共に関わろうとしている点で評価すべき面もあるという、非常にバランスの取れたコメントをされたと思うのですが、私は個人的にはこうした神社の動きにはとてもショックを受けました。

いままで靖国神社は戦争を称揚する特殊な神社だと思っていましたが、その他の神社は戦後は国家神道とは一応絶縁しているものと思っていたので、一般の神社でも改憲賛成署名を募っていると知って驚きました。さらにその後、「日本会議とは何か」といった本を読んだところ、神道政治連盟の背景には神社本庁が付いている、と知ったので、日本の神社の多くは戦後も実は国家神道復活を目指しているのか、とショックを受けました。素朴な感想なんです。

それに関連しての質問は、やはり神道が公共性に目覚めてしまうと国家神道になるんじゃないかと思うのですが、いかがでしょう。近代以降の日本における神道と国家の不幸な関係に戻ってしまうことになる危険性があるのでは？

もちろん神道にも、もっと長いスパンで、古代以来の歴史の中で見ていけば違う局面があった時期もあるだろうとは思いますが、いま日本の神道が公共性に目覚めてしまうと、近代以降の国家神道の誤りを繰り返すことになるのではないかと、素人的には、すごく危機感を持っています。その点について、伺いたいと思います。

関連して、最近、天皇の「お気持ちの表明」というのがありましたね。あれに対しても私は疑問を感じていて、個人的にはこれまで私は、いまの天皇は、いつも「憲法を守り」と発言しているので、その点は評価していたのですが、あの会見を見た後は、非常に複雑な印象を持ちました。

日本国憲法は、戦後の天皇は象徴にすぎないと言っているわけで、「象徴」だから、当然、国事行為も限定されていますよね。象徴として、それだけをやっていればよいから、あまり負担もなく、終身務めることができるだろう、仮に高齢になって難しくなったら摂政を置けばいい、という趣旨のはずで、私は基本的には、ここは右翼の人と意見が同じになってしまうんですが、天皇というものはそれでいいと思うのです。憲法に定められていない「公務」をどんどん自分で増やして行って、それが負担だから生前退位の仕組みの整備を求め、というのは何か変な議論だと感じます。

憲法を守ると日頃発言していることに対しては、私はすごく敬意を抱いているんですけど、憲法に定められていない天皇の仕事の領分を社会の中で増やしていこうとしていることに対しては、これは危険だと感じています。

実際に、あの「お言葉」の中でも、単に憲法で定められたことだけをするのではなく、「社

会の中で生き生きと機能する天皇制」をめざすとおっしゃっていますね。私は、社会の中で天皇制が生き生きと機能してもらっては困ると思っていて、天皇は象徴をやっているくらいがいいと、という立場です。それが戦後の日本国憲法で定められた天皇のあり方だと思うので、あの会見には少し危惧を感じました。この点、小林先生はどう考えておられるでしょう？

鎌田先生のお話を伺っていて、「国家神道的な神道ではなくて、もっと違う、人間的な、人類史的な神道の在り方と、大国主の神道を復活させる」という考え方に共感しながら、もう一つで、ちょっと思ったのは、神道は日本だけのものなのではないでしょうか。もっとアジア的な伝統の中に開かれた存在として捉え直す、といった可能性はないのでしょうか。仏教はもちろん朝鮮半島から来たわけけど、原始神道についても元来は朝鮮の習俗だという話もあったりします。

もちろん「アジアに開かれた神道」などと言っていると逆に大東亜共栄圏みたいな話にもなってしまう危険性もあるかもしれないのですが、歴史の現実として、古代日本の神道が成立するにあたっては、アジアの伝統とのつながりもあったのではないかと思います。こうした点につき、どのように考えておられるか伺いたいと思います。

○小林 とても大事なポイントを提起していただきありがとうございます。

1点目は、この本に書かれた中心的な主題なんですけれども、神道政治連盟とか日本会議については、今年になって注目されるまでは知らない人が多くて、神社というのはみんなが和やかな気持ちでお参りするところだというイメージの人が多かったと思います。

私が今回の本で強調したのは、神社に多様性があるという点なのです。例えば神社本庁は、改憲署名の指示を各神社庁に出しています。でも、各神社庁が一様に従ったわけではありませんし、各神社庁の指示に従って各神社が同じように行ったわけではなくて、それぞれの自主的な判断で、積極的にやるところがあったし、さほどしなかったところもあるのです。

例えば、乃木神社は乃木将軍がご祭神なので極めて積極的だったと想像できるわけなんですけれども、それが『東京新聞』などに注目されて話題になった。そこで、普通の神社だと思って初詣に行った人がそれを見て違和感を抱いてしまって、「もう、おさい銭なんか入れたくない」とか、「神社に行きたくない」という人が現れて話題になったのです。

調べてみたところ、47都道府県の神社庁のホームページで「積極的に改憲署名をします」と言っているのは東京都のみですね。乃木神社は東京都にあります。その東京都の神社庁長の話を伺えて収録したので、ご覧いただきたいと思います。どういう考え方で行っていらっしゃるかということも明言されています。

でも、そこから分かりますように、全ての神社が同じようにしているわけではまったくなくて、内心、「こんなことはしない方がいい」と思っていたり、消極的な形ながら指示に従わないという神社もたくさんあると思います。その辺の多様性も紹介したいと思います。最近、多くの人が神社に共感を持つ一方で改憲署名には違和感を持つので、このような実

態は正確に理解した方がいいのではないかと思います。

「憲法」を擁護したい人にも、ぜひ読んでほしい本なんですけれども、神社界の人にも、ぜひ読んでほしいとおもいます。神社が発展するためにどういう路線を歩くのがよいのかということを考えてほしいという気持ちを込めて書きました。

神社界の主流の人たちは戦後ずっと改憲を支持する方向で運動をしていて、戦後改革で失ってしまった公共性を取り戻したいと願っている。ただ、私たちの公共哲学から見ると、公共性と公は必ずしも同じではありません。神社界の人は、公的な国家との結び付きの復活を求めている。戦前のような全面的な国家神道の復活までは主張しない人が多いのですが、部分的に国家との結合関係の回復を求めているのです。公共性の回復自体は大事なことで、たとえば祈りの公共性というのは、天皇をはじめ人々が他の人々や世界が幸福になるようにという気持ちで祈るところにあります。ただそういう公共性は、べつに国家との結合関係なしでもできます。むしろ現在の民間の神社本庁の立場から、公共的な活動や祈りを進めていけばいいと私は思うので、そういう公共的な神社の発展の可能性をぜひ考えてほしいと考えています。

例えば鎮守の森には公共性がありますし、べつに氏子ではなくても神社の中に多くの人が入って祈れるというのも公共性の表れです。そういう点で、これまで戦後の神社が努力されてきたことは貴重だと私は思うので、そういった公共性の在り方を、もう一度見つめて、より先に展開することが大事でしょう。でも、それは必ずしも国家との結合という意味での「公性」の回復ではなくてもよいのではないかと。そういうことを論点として、戦後の民間の立場から公共的活動に敬意を表しながら提起をしました。

日本会議批判の本はストレートに、神社界の改憲運動や、安倍内閣との関係を取り上げて批判しており、一種のカルトだと言っている人もいますね。それがうそであるかということ、私の本の中に、実は戦前のような「国体」の復活を目指している人がいるのは確かだ、ということを具体的に示してあります。そこも、ぜひ、知っておいていただきたいと思います。

神道政治連盟などの中心の人たちの発言を、神社界の中の発行物で見ると、戦前と同じような祭政一致を目指すという内心では考えながら、公には現在は自民党改憲案を実現しようとしている人がいることがわかります。このような目的を秘めながら第1条で天皇を元首としようとしているのです。

このことは、一般の新聞やテレビなどでは、ほとんど報道されていません。そういったポイントを、日本会議批判などの本では指摘していて、これは公共的に知られるべきものであると思うので、そういう部分も含めて正確に紹介をしました。

もっとも、すべての関係者がそういう目的を持っているとか、全面的に「カルト」というのは間違いで、そうではない神職の方々も少なからずいるのです。批判する側から見ればカルトのような思想を一部の人が持って活動しているというのが実態なので、その両面を見て議論をしていくべきだと私は考えています。

第2点目ですが、これも非常に大きな論点で、栗田先生は天皇のメッセージに違和感があると言われましたが、違和感は、左翼的な人や憲法学者と右翼的な人の両方から出ています。

左翼的な人や憲法学者などは、例えば「憲法の解釈において天皇は国事行為だけをすべきであって、それ以外はすべきではなく、今回のメッセージでは、栗田先生がおっしゃったような巡幸行為などを中心に置かれている。しかも生前退位という帰結につながる点では政治的な意味を帯びてくるので、天皇が政治的なメッセージを送るということは憲法の原理に反するのだ」という批判をせっせと書いています。

他方で右翼的な人、特に神社神道に関わる人たちが、どういう批判をしているかというところ、天皇については、明治憲法以来、生前退位を認めないというかたちで制度がつくられてきていて、「現人神」という天皇の属性から見て、生前退位をして一人の人間に戻るのはきわめて人間的なことだから、認められないというのです。それを認めると、万世一系の血の原理で成立している国体が揺らぎかねない。ですから、摂政を置くというかたちにしたいという主張があります。

そういう方の論理は、「生前退位をする必要はない。なぜならば、公共的な巡幸活動などをする必要はなくて、天皇は宮中深くに存在して、そこで祈っていらっしやれば十分なので、いくら高齢になられてもそうすることはできるわけだから、生前退位する必要はない」というものです。

ですから、右とか左によって単純に意見が分かれるというわけではありません。単純な左右を超えた非常に大きな問題に関して、天皇陛下のメッセージが今後の日本の在り方、あるいは天皇制の在り方について問いを投げ掛けているということです。

私自身の考え方としては、日本の多くの人たちは、むしろ生前退位を認める意見を持っていて、かなりの人は天皇陛下のメッセージの内容に、それほどの違和感を持っていなかったのではないかと思うんです。

「憲法」解釈論としては、憲法学者の反対論には、相当の論拠があると思います。ただし、ぎりぎりのラインで、あのメッセージは合憲とすることができると思っています。

これは9条解釈、特に自衛隊の存在を認めるか認めないかという議論と同じです。私は自衛隊の存在は合憲であると解釈していますが、同じように今回のメッセージも、ぎりぎり合憲と言えらると思っています。

そもそも巡幸などのような、国事行為以外の「公的行為」については、通説は合憲として認めています。憲法上の規定はないのですが、「象徴行為」（象徴としての地位に基づく公的行為）あるいは「公人行為」（公人としての地位に基づく行為）として容認しているのです。天皇のメッセージでは「象徴として務め」とか「象徴的行為」という言葉が頻出しますが、これは象徴行為説を天皇ご自身が念頭に置かれているのだらうと思っています。

これは憲法の解釈問題ではあるんですけども、憲法の本質的性格とも関連しています。なぜかというところ、近代の「憲法」は基本的に、立憲主義とされているように権力の在り

方を拘束するところに最大のポイントがある。天皇については、私の解釈では政治的な意味のある事柄に関しては、国事行為として列挙されていること以外はしてはいけないとされていて、それについても実質的な政治的権能を持っていないとされています。

問題はそれ以外の行為です。純粋な私的行為は禁止されていないわけですが、公共的な意味のある非政治的行為はどうか。私はこれを「非政治的公共的行為」と呼びたいのですが、通説ではこれを「公的行為」として認めています。ところが、ここについては憲法上の縛りも明文ではありませんし、憲法の本質からして天皇の行為規範もないわけです。つまり、天皇はどうすべきかという公共的行為の規範については、「憲法」の原理からして定められていないわけです。

だから、今度の天皇のメッセージは、憲法の明文で定められていない公共的行為についてのお考えを表明しているということになります。その内容やそれを表明するということ、党派性を帯びるという意味における政治的行為ではないと判断されるならば、これは合憲と言えるのではないかと私は思うのです。

そして、天皇ご自身が、公共的な活動をできなくなるから退位したいというふうに言われたときに、それを認めるべきかどうか。いまの「憲法」では、天皇には通常の人権はないんですけども、本人の意思に基づき退位する可能性を認めるということは、天皇に人権を認めることになります。たとえば亡くなった奥平康弘先生という非常に有名な、平和主義的な憲法研究者も、退位の権利は認めることが必要だ、という主張をされています。

ですから、あのメッセージは、戦後の昭和天皇の人間天皇宣言を代々引き継いでいくという意味を持っています。実際、メッセージの中に「個人として」という言葉があり、これはきわめて重要です。「公ありて私なし」という考え方によって、天皇の中に個とか人格を認めないというのが右翼的ないし神道的な考えに強いのです。これに対して、そういったものを認めて、天皇のあるべき姿を探究することは近代的な人権感覚に即していると思います。多くの今の日本人感覚からすれば、それはむしろマッチするのではないかと思います。神社神道でいうように天皇陛下が神道の伝統を体現しておられて皇祖皇宗の意思を踏まえているにしても、同時に一人の個性ある人間でもいらっしゃるのです、この考え方は論理的にも正しいと思います。

このような考え方は今の「憲法」と非常に親和性がある。国民主権や民主主義とか、あるいは政教分離と整合的なのです。今の天皇陛下は常々、「先の大戦」の反省や平和への思いを語られているので、今の平和憲法に即した考え方を言われているのです。

あの天皇のメッセージは、べつに「憲法」の改正を要求するものではないし、生前退位に可能にする法律を除けば、「お務め」についての考え方を法律にする必要もない。その意味では、法律ではなく、まさに多くの人々の「共有の理解」に関わるメッセージだと思います。

そういう広い理解として国民の意識に定着していけば、天皇制に関して現行「憲法」を改定する必要はなくなると思います。だからこのメッセージを多くの人々が深く理解して、

今の憲法のもとにおける、多くの人たちの神社に対する親しみの感覚と両立するような天皇についての考え方が再確認されるべきではないかと思うのです。

そのことを、私は本では市民宗教という言葉で表現しました。アメリカの大統領は『聖書』に手を置いて就任の宣誓をするのですが、それは当然、人権や民主主義を前提としています。それはキリスト教の文化や歴史のもとで行われていることですが、今回のメッセージは、日本において、同じような可能性を切り開く意味を持ち得るのではないかと思います。

この考え方は、法律にする必要はなく、そうすべきではないけれども、多くの人がしっかりと議論して、これを基礎にして今後の政治の在り方を考えていくべきではないかと思っています。

○鎌田 この議論や問題点は実にデリケートで、さまざまな解釈がありえます。同時に決着として、法律的に政治的に一つの立場を選択しなければいけない。それがどういう最終形になるかは日本の未来を決定するかなり重要で大きな試金石だと思います。

今の問題に関連して話をしておきますと、今上天皇は極めてヒューマニズム的ですよ。誰が見ても。基本はそうだと思います。非常に平和主義的な、ヒューマニズム的な思想と経験をベースにして戦後の皇室の在り方や象徴天皇の在り方を模索していると思います。その意味で、歴代天皇の中でも最も平和性を体現している一人ではないでしょうか。

なので、栗田さんが感じるほど強い違和感はありませんが、私は別の観点から非常に危惧しております。問題は、皇位継承の問題に関わるわけですね。平成になったときに、平治の乱を思い出したと言いましたが、その一一五九年に起こった平治の乱のもとには、一一五六年に起こった保元の乱です。日本の元はいったい何なのか、「元を保つ（保元）」とはどういうことかと問うような元号を定めた時に起こった乱が皇位継承をめぐる激しい乱でした。この時、院の崇徳上皇と後白河天皇の間で皇位継承をめぐる対立が起こったのです。それが「保元」の乱でした。

日本の政治史は天皇の践祚や即位に際して問題が噴出しますね。多くの家庭でも遺産相続などの場合に荒れることが多々ありますが、相続の時に問題が噴出します。

ですから、今回の皇位継承に関わるさまざまな問題がいろいろな問題を含めてどっと出てきて、一番悪い選択は、「天皇大権」をうたった、「明治憲法（大日本帝国憲法）」的などころへ戻るといふ極右的な選択で、私はそれを絶対支持しませんが、それに近い動きが起りそうです。

それから、皇位継承をめぐる、さまざまな思惑が出てくるので、女帝論も含めて、議論が百出することも考えられます。敬宮愛子内親王の置かれている立場や、皇位継承権をめぐるさまざまな宮の在り方とか、いろいろな問題が次から次へと出てきて、なかなか厄介な問題を抱えている。その厄介な問題に、最終的に、どういう政治的解決がもたらされるのか、日本乱世の一つの試金石と思います。

もう一つ、2年前に伊勢での神道に関するシンポジウムの時に話したのは、神道とは、

実は「ユーラシア・環太平洋的交響楽」であるということでした。だから、神社に祭られている神様は、日本自前の神様も、縄文時代からの神様もいれば、朝鮮半島から渡っている神様もいれば、インドや南の方から、中国から、フィリピンの方から、さまざまところから渡海して来た神様がいて、それらを併せて「八百万（やおよろず）」になっているのです。そこで、日本の神々は、ユーラシア大陸的、かつ、環太平洋的な神観の一大交響曲ですね。それが神道の基本的な神々で、それを中央神話的に束ねてまとめたのが『古事記』や『日本書紀』です。

そういう観点を述べたら、保守派の大学教授から、鎌田さんの話の中には天皇のことが一言も出てこないのが問題だと追及されたのですが、天皇制は、たかだか7世紀ごろから始まって、8世紀になって、いわゆる天皇制として確立していったのですよ。それ以前からいっぱい神様はいたわけですから、『古事記』や『日本書紀』が記録される以前からいたたくさんの神々の縄文時代以降の1万年の歴史、いやそれ以上のもっと旧石器時代からの何百万年の歴史の中で神とは何かということを考えてきました。私はそういう神道の立場なので、天皇制の神道は神道の **one of them** なんですという言い方をし、神道の根幹をどう立てるのかを何よりもまず明確にしたいのですと答えました。

○千葉 それでは、フロアからご質問、コメントをお願いしたいと思います。

○フロア 1 津城寛文 筑波大学の津城と申します。今日は、ちょっと来ようかどうか迷いながら、やっぱり来てよかったと思いました。貴重な刺激を受けました。質問だけコンパクトに、お一人ずつにさせていただきます。

まず小林先生。先生が使われた「市民宗教」と「公共宗教」という二つの言葉について、私は、**public religion** を「公共宗教」と日本語訳した責任者で、英語を作ったのはカサノバ先生ですけど、これが悪用されると私もカサノバ先生と一緒に連帯責任を問われる立場にありますので、なるべく、良く使っていただきたいなと思っております。

それで、私もカサノバ先生も言っていることで、でもなかなか理解されていないのが、**public religions** と、複数形で考えるのが非常に重要なところだと思うのです。市民宗教というのは、カサノバさんの言い換えでは、「市民社会レベルの公共宗教」で、公共宗教の一つのサブタイプになります。

国家宗教というのは、国家神道なんかもそうですけど国家レベルの公共宗教で、政党などが宗教活動をするのは政治社会レベルの公共宗教、というようなタイプ分けが、されています。

それで一つお伺いしたいのは、「公」と「公共」と「私」の区別、また「市民宗教」と「公共宗教」の区別について、「公共」というのは「市民社会」にはほぼ重なるようなものとして考えているのか、ということです。カサノバさんが使っている「公的領域」の分け方は、ある人の分け方に沿って、国家レベル、政治社会レベル、市民社会レベルの三つに区別したいと言っています。そういう区別の仕方は、妥当と思われるかどうかということと、その

場合、「公」と「公共」の線引きは、どこに対応するか、そこをお教えいただきたい。

栗田先生にお聞きしたいのは、パレスチナ問題は宗教問題ではないとお話になりました。確かに、そういう側面もあると思いますけど、バルフォア宣言辺りから、全体としては、やはり終末論のシナリオに沿って動いているところがあるのではないかと。自覚的にどうかはともかく、暗黙のうちにでも、ですね。

イスラエル人が、離散状態から約束の地に帰るのが終末論のシナリオになっていて、それに沿って動く勢力があって、自覚的にせよ、無自覚的にせよ、終末論的なシナリオで動いている人たちがいるのではないかと、ということです。

それと関連して、中東にアメリカ、その他が関与するのは、石油をめぐるものである、というご指摘がありました。最近『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策』というミアシャイマーらの書いた本が評判になっています。政治学的に信ぴょう性はどうか、まったくわかりませんが、私のような宗教学徒には、とても面白く読めました。

イスラエル・ロビーの方が石油ロビーより力が大きいこと、石油ロビーは金のためだけに動くがイスラエル・ロビーは合理的な利害で動いているのではなくて、かえって利害を崩すような動きもして、終末論のシナリオを演じているという意見があって、私は、そちらの方が面白いというか、そういう側面があるのではないかと思います。

その二つの関係について、さきほど千葉先生が「陰謀論」と言われましたけど、そういう自覚的、あるいは無自覚的なシナリオによって動いている人たちを、どう考えるかというのを先生からお伺いしたいと思います。

鎌田先生は、先ほどご自分を少数派と言いましたけれども、私も少数派の方の神道信仰で、非常に近いところがありまして、ただ受難はしていません。私は、受難したことはなくて、先達を盾にして後ろを歩いてきたというか、全然、矢を受けたことがなくて、やすやすと歩かせてもらっています。

そして、こういう「戦わない神」という神話的な原型があると考えています。イエスも、万軍の主を背負って戦えるけれども、あえて十字架に掛かるというモデルを示している。このモデルが、ガンディーのような人、その他多くの無抵抗の人々を作っています。

時節には適わない、歴史の大きな流れには抗えない、という名文句がありますけれども、強靱な無抵抗の平和のために、何かより良いモデルがあるかどうか、もう少し具体的に、たとえば靖国神社の代表が無抵抗の平和の使者になるとか、そういうモデルの仕方があるかなとも思いながら、何か先生の考えておられる具体的な、戦略があれば教えていただきたいと思います。

○フロア 2 米田晃 米田と申します。今日は、それぞれの先生の立場からお話を伺いました。ありがとうございました。

二つ、質問があるんですけども、その前に、実は、私は 20 年ほど前に世界連邦運動をやっています。それは、アインシュタインと湯川博士が平和な世界をつくらんといかんということから始めた運動です。

私は心の勉強もしていたものですから、組織をつくって、平和、平和と外に向かっていろいろなことを呼び掛けたり、活動するというふうにしても、それだけではとても平和はできない。どうしてかといったら、心の問題とか意識が現象化していくのが世界ですから、心や意識が変わらなかつたら平和にならない。ということは、一人一人の中に平和の心がなくてはできないとすごく感じまして、その運動をやめちゃったんです。

鎌田先生に伺いたいんですけれども、今日の最初のあいさつのときに身心変容技法研究会をつくられて活動なさっていると伺いました。私は心の問題とか身心の変容に関心と興味があります。私自身が世界連邦活動を2000年にやめてから、心の問題を啓蒙する運動をやってきました。

さっき申しましたとおり、心の平和によって変わらない限り、外の世界は平和にならないということ強く感じております。今日は時間がないので、その答えは後ほどまたゆっくり聞かせていただきたいと思います。素晴らしい活動だと私も思います。

もう一つ、小林先生のスライドの「神道的政治とは」という中にエコロジー的平和主義というのが書かれているんですけれども、このエコロジー的平和主義は、どんな目標というか、理念なんでしょうか。それを伺いたいと思います。

○フロア3原 危機管理学会の監事をしております原と申します。栗田先生にお訊ねします。

私は現在、現役なので、いろいろと分析していきまして、特にアメリカの場合、軍産複合体というのが、アメリカのGDPというか、相当な部分を占めているんです。ということは、アメリカは軍産複合体に従事している関連団体を全部養っていかなければいけないわけですね。日本でも、いま武器輸出三原則が緩められて、その傾向にあります。ロシアもフランスも中国も。

普通選挙制がない中国の人は別としましても、これをなんとか縮小しない限りは、絶対に戦争がなければ生きていけないわけですから、アメリカなんかは、どこかと戦争することを糧にしてGDPを上げなければ国の経済が成り立たないわけです。

そういう点で、トランプさんに期待しているわけではないんですけれども、大統領選挙を通して、ヒラリーさんは駄目ですね。あの人は完全に向こう側の、要するに金融資本系、ユダヤ系という言葉は使いませんが、そういう軍産複合体の側からお金をいっぱいもらっていますから。実際はトランプさんもそうかもしれない。

それはともかくとして、普通選挙制のある国は、軍産複合体に関する情報を国民にどんどん徹底して、なんらかのかたちで、この経済構造をつぶしていくことの方が先ではないかと、僕は経済経営系だから思うんですけれども、何かいいアイデアがありましたら、ぜひ伺いたいと思います。

陰謀体制ではないんですけれども、陰謀体制前よりも絶対に軍産複合体を生かしていくためには、養っていくためには戦争が必要なんですね。そんな問題についてご意見をお伺いしたいと思います。

○フロア4 西尾 西尾と言います。小林先生、お久しぶりです。たぶん5、6年ぶりだと思います。当時はNGOにいた者です。お3方の先生に、それぞれ質問させていただきます。

小林先生には、先ほど日本神道政治連盟や日本会議の話をしていただきましたけれども、いわゆる安倍政権を支える政治勢力としての創価学会と公明党。本来であれば決して交わることがないというか、連帯するはずがないかたちのものだと思いますけれども、なぜか結び付いて政治を支えている。創価学会および公明党に関して、いまの位置付けなど、先生のお考えやご意見を、ぜひ伺いたいと思います。

続いて栗田先生に、先ほどのISの話は大変興味深く聞かせていただきました。私が見る限り、イスラム教は怖いというプロパガンダが非常に先行していると思います。これを場面を展開するためには、イスラム教やキリスト教ももとを正せば通じるものがある、有また有害である面もある、そういう二面性というところについて。こういうイスラムやイスラム教徒に対するネガティブキャンペーンを、どういうふうに覆していくか。それに対しての先生のお考えやアイデアがあれば、ぜひお聞きしたいと思います。

最後に、鎌田先生に質問させていただきます。先ほどの大本の話は非常に興味深く聞かせていただきました。神道と異なる、廃仏毀釈が行われる以前と以降の、いわゆる伝統的な神道と国家神道との違い。そこのところを日本が見過ごしてきたと私自身は思っています。それについてのお考えと、伊勢神宮の、いまの政治利用について、先生のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

○小林 ありがとうございます。まず津城先生から、公共宗教についてのご質問をいただきました。お話にあったようにカサノバ先生や津城先生が公共宗教という言葉が使われたので、私もこの言葉を使うようになりました。私たちの公共哲学のプロジェクトでは常々、国家と公共の関係を問うていて、日本では公と公共は同じように使われることが多いけれども、これを使い分けていくことを提案しています。

日本語の「公（おおやけ）」は、国家、官僚、天皇、幕府などと非常に関係が深かったもので、お上からの感覚が強い。これに対してヨーロッパのパブリック（公共）には水平的なイメージが強くなるので、この二つをはっきり使い分けて、「公ではない公共」の可能性を開拓していこうとしているのです。

公共宗教、Public religions という言葉を考えるときに、やはり、この関係が気になって、初めの段階の議論を見ると、その二つの違い、つまり私の言葉でいうと「公宗教」と「公共宗教」の差異が明確でないという懸念を感じました。先生がご指摘のように公共宗教が国家宗教という意味も含んでしまうと、公共宗教を主張する議論が国家宗教の擁護という逆の方向になってしまいますので、私はそこを危惧して、「公共宗教」を「公共的スピリチュアリティ（霊性）」という言葉で表したときもあります。

今回の本では、公共宗教という言葉はそのまま使うことにして、「公宗教ではない公共宗教」という考え方を提起することによってその違いを明確にしました。ですから、先生が

ご指摘のような複数形の公共宗教、つまり国家と結び付く一つの宗教ではなくて、「世の中にたくさんある宗教が公共的な機能、役割を果たす」という意味で公共宗教という言葉を使ったのです。仏教であれ、神道であれ、キリスト教であれ、そういう公共宗教としての役割を果たしていくことは、とても重要だというのが私の考え方です。

公共哲学で言う公共というのは、基本的に市民社会という場合の市民と非常に近い関係ですので、そういう意味で公共宗教という概念を市民社会レベル中心に私としては使っております。

これに対して、市民宗教の概念も非常に近いところがあるとは思いますが、ロバート・ベラーの市民宗教という言葉は、もともとジャン・ジャック・ルソーから来るわけで、市民宗教についてはそういった議論をもとにして使っています。

今回の本は一般向けの新書ですから、詳しくは立ち入っていませんが、ロバート・ベラーは政治の根底にある宗教的な次元という意味で使っているので、その用法を意識して「日本の市民宗教」を問題提起しました。

政治の底に働く宗教的な次元ということになるので、「仏教的、キリスト教的等々とたくさんある」というイメージでは必ずしもありません。「アメリカの市民宗教」「日本の市民宗教」というように、この場合は「国民国家全体の市民宗教」という意味ですから、国民国家の中の複数の「公共宗教」とは意味が違い、国民国家については一つの市民宗教という場合もあると思います。ですから、「公共宗教」と「市民宗教」は非常に近い概念だと私も思っていますけれども、そういう使い分けをしております。

それから、米田先生が質問されたエコロジー平和主義については、私がそういう主張をしたというよりも、神道界の方々の見解の中にそういった要素もあると述べています。先ほど少しご紹介したように、神社神道のいろいろな立場を整理しましたがけれども、神社本庁系の方々でも神道は自然を尊重し、自然と調和することを重視する考え方であるということは、よく言われているわけです。ですから、エコロジー的要素はあると思います。

その上で、例えば原発問題のときに、原発に対して自然破壊の観点から反対するのかどうか。この論点があるわけですね。おそらく主流派の人たちには、原発の再稼働や推進という現政権の考え方を支持する方が多いだろうと思います。

これに対して神社本庁に近い方でも、なるべく早く原発はやめるという主張を表明している方もいるわけです。それをどこまで強く言われるかという点ではさまざまな違いがあるでしょうけれども、そういう政治的な問題も含めてエコロジー的な主張をする可能性も神道にはあると思います。

それから平和問題に関しては、もちろん第2次世界大戦で国家神道は大きな役割を果たしましたし、『記紀』の中にも戦争を擁護するように使える部分もある。これは明らかだと思いますけれども、逆に、平和を志向する要素もある。鎌田先生がお話になっている出雲神話などは典型的ですし、私は、天照大神の岩戸神話などにも、そういう平和的要素を見ることができると思います。

今回の本の特別対談の中で、秩父神社の藺田稔宮司は、改憲を主張しながらも「平和憲法」の9条は維持すべしという主張をされています。これは貴重な議論だと思うので、神社本庁系の中でもそう言われている高名な方がいらっしゃることを、神社に親しみを持つ人はしっかりと読んで考えてほしいと思っています。さらに最近の天皇ご自身も、昭和天皇にせよ、今上天皇にせよ、天照大神の神話や神道的な発想は平和的であるという趣旨の発言もあります。そういうところを重視すると、神社神道には平和主義的な要素もあるわけです。

だから、エコロジー的な考え方と平和主義的発想とを結び付けて、エコロジー的平和主義の議論も、神社神道の思想や考え方の中から引き出すことができる。こういう趣旨でエコロジー的平和主義という論理的な可能性を神社神道の内部から見出したわけです。

もちろん、まったく別の解釈、別の主張もありますので、これはたくさんの解釈の一つですけれども、神社に親しみのある人たちには、そういう可能性についてもしっかり考えてほしいと思っています。

三つ目の西尾さんのご質問に関して、面白いエピソードから言うと、この本についての書評として一番初めに気づいたのは、編集者から知らせていただいた『公明新聞』の紹介です。第1章で、宗教団体が政治的活動をするのは政教分離に反していないというところも紹介してくださっています。公明党が政教分離違反という批判をされた時期がありましたので、その批判は正しくないということにもなると考えたのかもしれませんが。私は、民間の宗教団体が国家と独立して政治的活動をするということに関しては、確かに批判されるべきではないと考えています。

ただ、私の本の基本的な論点は、特に神社について、宗教的な論理と政治活動のつながりを明確にしてほしいということです。宗教団体が政治活動をするならば、宗教の考え方からこういう政治的な議論や政策を主張しているということを明確にするという公共的な責任があるのではないかとということを主張しています。

仏教でも同じことが言えるので、創価学会にもまさにこの点が問われると思います。仏教では政治的な発言や活動をされている方々もいらっしゃって、例えば「安保法」に反対する声明を出された宗派とか、あるいは「憲法」との関係で平和を重視するという主張をされている方もいらっしゃいます。

そういう流れの中で、創価学会が公明党を支持する以上は、自分の宗教思想から「安保法」や改憲についてどのように考えるかということ、現実の国際情勢との関係だけで説明するのではなくて、宗教的理念そのものから明快に説明することが公共的責任として要請されることになると思います。

○栗田 中東に対する欧米や先進国の関与を分析する際、経済的な要因ばかり見るのではなくて、終末論とか、宗教的な要素も考えるべきではないかという問題、それと軍産複合体についてのご質問もあったので、両方を合わせてお答えしたいと思います。

基本的には私は、今日、話を聞いていただいて分かったと思いますが、できるだけ宗教

の問題として捉えないで、即物的に、経済的・政治的な要因から見ていきたいと思っている立場なので、極力そういうふうの説明しているのですが、ただ実際に、例えば「中東で欧米が石油を確保したいとしたら、他に、いくらもやる方法があるだろう」という疑問が湧くということはあると思います。

アラブ諸国と仲良くした方が賢明に見えるのにイスラエルの方と協力してしまう。明らかに、合理的に考えて経済目的だけだったら、こうやるべきなのに、そうではない行動を取ってしまう。そこに、やはりイスラエルロビーの力があることは否定できないと思います。

ただ、それを宗教的、あるいは文化的な要因と位置づけることはできますが、一方では、いまの先進諸国の経済において、石油を得るというのももちろん一つの経済的な利益ですけど、戦争とか紛争があったときは、そこに介入すること自体、経済的利害がある。先ほど、軍産複合体のお話がありました。

仮にいまの世界の先進国の経済構造の中で、いまは石油の確保という問題以上に、紛争を引き起こして、戦争をすること自体がもうかる、というふうに、経済のあり方自体が変わっているとしたら、戦争や紛争を引き起こすには宗教や文化を利用するのが一番手っ取り早いやり方なので、戦争経済を支えるための一種の文明論的なツールとして、終末論とかそういうものが使われているという説明も、逆にできるのではないかと思ったりします。

ご質問にあった、いまの中東に対する欧米や日本の関与の背景を考えるにあたり、軍産複合体の利害は決定的だというのは、おっしゃるとおりだと思います。

去年 I S の問題が深刻化し、後藤さん・湯川さんという日本人人質が惨殺されるという事件があったときに講演会で「どうして I S のような存在が生まれるのだろう」「どうしてテロがなくなるのだろう」と質問された時にも答えたのですが、基本的には、テロがあるから戦争が必要だという論法に利益を見出す勢力、どこかでいつも戦争が起きていることが必要だという勢力が世界にある以上、こういう悲劇は繰り返される、結局は軍産複合体の利害ということだと思います。そういう視点は決定的に重要だろうと思います。

それをどうやって食いとめていくかに関しては、やはりご指摘の通り、実は社会には、われわれの思わぬところでわれわれの意識を操っているマスメディア等の装置が存在している。そういう操作に抗して、問題の根底にある軍産複合体の利害といった要因を絶えず意識するように指摘し続けていくことが大事です。

いま、例えば学会でも軍事研究を解禁するかどうかをめぐる検討が行われています。戦後、日本学会は二度にわたって軍事研究をしないとする声明を出してきたのに対し、「個別的自衛権の範囲なら軍事研究も構わないのではないか」「デュアルユースと言って、軍事技術と民生技術は線引きできない」といった論法で、変更を迫ろうとする圧力が力を増しています。

このような動きを、やはり国民全体で監視し、批判していくことが必要です。いま日本は軍事国家になるかどうかの天下分け目の状態で、経済、政治、文化等、全てにおいて軍

事が中心の社会になっていくかどうかという、今年あたりが節目の年です。これをいったん許してしまったら、今後日本は世界中の戦争に反永久的に関わっていくことになりかねないような状況ですので、やはり危機意識を持って批判・反対していくことが大事です。

西尾さんからのご質問ですが、ISは欧米諸国がつくり上げた側面があるとか、対テロ戦争をやるためにテロ組織が必要なので国際社会が泳がせている、放置している面があるとはいえ、やはり一般のマスコミでは、「イスラーム国」とも名乗っているシイスラームと関係があるんじゃないか、イスラームは怖いみたいなイメージがある。そういう誤解を、どうやって解きほぐしていくことができるかというご質問です。

私は今日はあまりイスラーム自体について論じることはなかったんですが、イスラームについての誤解を解くにあたり、先ほど述べたように、中東にはユダヤ教、キリスト教等の啓示宗教の伝統があり、それを受けてイスラームができてきた、すごく多宗教・多宗派的な蓄積の上に、最後にイスラームが出てきたということを確認しておくことは重要だと思います。イスラームの中には、そういう先行の宗教、宗派を含み込んだ豊かさ・多様性があるので、そこを見ていくことは大事だと思います。

先ほど鎌田先生の方から『旧約聖書』のお話がありましたけど、『旧約聖書』は、やっぱり面白いですよ。単なるお話ではなくて、ある意味で、古代なりの思想家列伝なんですね。

登場する一人一人の思想家の間は、何世紀も空いていたり、場合によっては千年も空いていたりするわけですが、だけど『旧約聖書』を編纂した段階の人々が、それまでの人類史の中で大事だと思った思想家とか、その思想家が、その立場や行動のゆえにどういう受難をこうむったかということを書いた、古代なりの思想家列伝みたいなものが『旧約聖書』なわけですね。

イスラームを理解しようという場合に、まず読んでいただきたいのは、当たり前だけど『クルアーン』（『コーラン』）です。ちゃんと日本語訳がありますので、岩波文庫でもいいし、中央公論『世界の名著』シリーズでもいいですけど、それを読んでいただくと、『コーラン』と『旧約聖書』との連続性を感じられると思います。

ただ『旧約聖書』の場合は、もっと物語性があるって、個々の人物にまつわる章ごとに物語として面白く読めるようになっているのが、『クルアーン』の場合は、もっと時空を自由に往来して、ソロモンとかダビデとかイエスとかアブラハムとか、さまざまな思想家の事績やことばがちりばめられ、縦横に紹介・参照されている感じです。

イスラームはそれに先行するキリスト教、ユダヤ教という一神教の系譜を引き継いでいるので、もちろん最後に出現したムハンマドが最終的な預言者として尊敬されているわけですが、その前のイエスもモーゼも、それぞれアラビア語ではイーサー、ムーサーと呼ばれていますが、それも神の預言者で、その前をさかのぼっていけば、ダビデやソロモンも預言者なんですね。ダビデ（ダーウード）とかソロモン（スライマーン）とか、遡っていくとアブラハム（イブラーヒーム）がおり、さらに遡ると、最初に神と契約して、それを

破った人としてアダム（アダム）がいる。アダムからムハンマドまでの人類史全体を見渡そうとしているのが『クルアーン』です。

『クルアーン』では、要は『旧約聖書』、そして『新約聖書』と強い連続性は持ちつつ、全ての物語性は、「もうみんな知っているでしょう」ということで洗い落としてしまって、むしろ「ところで、イエスがこんなことを言っているんだけど」とか「だいぶ前には、アブラハムが、こんなことを言っている」とか、個々の預言者のことばや行動をよりストリートに紹介し、その意義を述べるというスタイルがとられています。

『クルアーン』を読み出していくと結局、『旧約聖書』『新約聖書』を全部取り込んだ上で7世紀段階の人類のために再構成したもの、それまでの人類史を、当時の人が意識できた範囲で総合・集大成した思想家列伝みたいなものであることが感じられます。その思想家はすべて神の預言者で、さまざまな時代、さまざま地域で、その地域の人が分かる言葉でメッセージを伝えていたけれど、その内容は要は同一で、唯一の神と人間の間の絶えざる契約の歴史であった、という風に捉えられています。一神教の神と人類との連綿たる契約史を跡づけようとするテクスなのです。

『クルアーン』を読むと、イスラームがキリスト教やユダヤ教を引き継いだ上で、そうした一神教の系譜の集大成として自らを位置づけていることが良く分かりますし、先ほど、大本教でしょうか、「スサノヲの道」という話が出ましたけれど、イスラームでは「アブラハム（イブラーヒーム）の宗教」という表現をするわけですね。

モーゼや、イエス、そしてムハンマドと、いろいろな人物が出てきて、神のことばをいろんな言い方で伝えているけれど、言っていることは同じで、元はといえば「イブラーヒームの宗教」という点では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は同根だということをはっきり認めているわけです。

当時、中東は人類史の中でも最先端の地域だったわけですが、それを反映してそれまでの人類の思想的・宗教的伝統を全て集約しようとしたイスラームのあり方であるとか、イスラーム自体の中にある多様性とか多面性を説明していくことが重要だろうと思います。

また、今日は、宗教の話に深入りしないようにしようと思ったので、触れなかったのですが、アラビア語で「イスラーム」というのは譲り渡すという意味です。譲るとか譲り渡す、特に神に譲る。戦争のときには相手に降参してしまう、城を明け渡すとか、武器を渡すことをイスラームと言うんですけど、神に対して人間が「かないません、降参します」と言ってすべてを委ねる、いわば「帰依」することがイスラームであるわけですね。

さきほど、譲り合いとか譲るという言葉がありましたが、イスラームというのも、語源的には譲り渡すとか降伏する、降参するということですので、イスラーム・イコール好戦的、みたいな根本的な誤解を解くためには、そういう説明の仕方もあるかもしれません。

○鎌田 まず津城寛文さんからの、戦わない神のモデルをどうやって作ることができるかという質問。これは、深い言葉しかないと思うんですね。人の魂に届くような深い言葉、そしてその言葉を伴う行動しかないと思います。

ガンディーが残したことも、イエスやモーゼなども、結果的には福音や預言というかたちで、未来を作る深い言葉と行動を生み出した。つまり命に届く言葉。そういう言葉と行動をそれぞれがどう実現・実践できるかということになるんですが、大本の場合は出口なおの「お筆先」とか、出口王仁三郎が『霊界物語』とか「耀盃」というかたちを作った。

芸術、アートが持っている力も極めて重要で、出雲系の歌の力をもう一回復興したいので、私はスサノヲの子分ですから歌を三〇〇曲ほど作って歌っています。今日もギターをそこに置いてあるんだけど、もう歌う時間はありませんが、要するに歌を歌うということが自分なりの実践でもあります。

二つ目の、米田晃さんの身心変容の問題ですが、私が本当にやりたいことは「楽しい世直し」なのです。「世直し」とは何かと言ったら、おっしゃるように自分自身が直っていくというプロセスを含まないと本当の世直しにならないので、その世直しに含まれる自己の変容の問題というところで身心変容になります。

ですが、その身心変容も、単なる心の問題ではないので、人間の生き死を含む、身体と心と霊性を含む関係性のトータルをどう変容することができるかということが、個人ができる最も重要な世直しだと考え、身心変容技法研究をやり始めたわけです。その中で、言葉や歌の問題は非常に重要な解決策を含んでいると私自身は思っています。

それから、西尾さんの質問は、なかなか複雑で難しい問題です。明治時代に、廃仏毀釈が起こってくる背景の一つは国学です。国学の「漢意」批判がベースにあり、同時に水戸学のような国体ナショナリズムを高揚する尊皇攘夷的な思想運動も大きな流れの中にあって、西洋列強国に対して興ったナショナリズムです。その時、日本独自のものをどう立ち上げていくかという時に神仏分離令が出たこともあり、それを引き金に廃仏毀釈運動が出てきます。

それ以前は、「神仏」と言ったり、「仏神」と言ったりしていたんですよ。本当に神仏習合文化が根付いていました。私は、この「神仏習合」以前に「神神習合」があったという立場なので、先ほど栗田さんの質問に答えたように、ユーラシア・アジア環太平洋的な神々の世界が神道の神々だと考えています。ですので、そこでは、神も仏も菩薩も、そんなに大きな区別はないんです。

そういう丸ごと、多様な神々や仏菩薩を同居させながら雑種的に仲良くして、棲み分けをしていたものを、強制分離し、分けし線引した。そこから廃仏毀釈に流れて行くので、やはり立て分けるとか分離分断するということが持つ問題点を、史観の中で自覚しなければいけないと思うんですね。

そして、現在の安倍政権の伊勢サミットにおける各国首脳への参拝等を含めた問題ですが、神社での改憲の動きもそうですが、安倍政権になって、特にそういう方面の動きが強くなっているので大変危惧しています。現在は大変危険な状況にあると思っています。

今上天皇は、それに対して空気で察知しながら、安倍政権の政治利用に対して何かブレーキをかけたいという意識が非常に強くあると思います。これは推測ですけども、その

流れの中で生前退位の発言も出てきていると思うんです。

つまり、今の状況で行ったら、伊勢も含めて政治利用されていく。天皇の地位も政治利用されていく。「憲法」の改正まで行ってしまう。そういうところへ行かないで、本当に平和であり得る伊勢の在り方とか、平和であり得る皇室祭祀の在り方とか、神社の在り方を念頭に置かれていると思うんです。

だから被災地、熊本にせよ、東北にせよ、頻繁に、あれだけ出向くということは、その土地にあるものを大切にしていくことが日本の基本であり、日本の神々を大事にすることであるという思想とつながっていると思います。伊勢だけが特別であるというような考え方はない。

けれども安倍政権の政治利用は、やはり伊勢は特別、スペシャルなんです。神社本庁も伊勢は特別、本宗ですからね。そういうふうにスペシャルにしていくこと自体が特権的な構造と権威と権力を作り上げる。私は、特権的なものを作り上げていくことが、もう一回、強固な天皇制になっていく危うい道だと思っています。

やはり、ばらばらな、やおよろず的な神道が必要ではないでしょうか。それは地域神道、地域神社を重要視する道です。中央の有名神社を重視するのではなく、その地域の鎮守の森、その一つ一つを、どうやって重要視して、そこで生きていくことができるかということに抜きにして、全体のことを政治利用するというのは非常に危ういところへ持っていく間違った道と私は思っています。

○千葉 どうもありがとうございました。非常に重要な話ですね。

○鎌田 千葉先生のまとめを聞きたいと思います。

○栗田 そうですね、千葉先生のまとめを聞きたいです。

○千葉 今日は非常に充実したご講演で、いろいろ考えさせられました。

○鎌田 それから、西田清志さんにも、ぜひ一言でも発言してほしいんです。

○千葉 地球平和公共ネットワークの創始者の一人でいらっしゃる西田さん。

○西田 今日は、いろいろなお話を聞いた中で、一致するところがやっぱりありました。スパイラル史観という話がありましたが、スパイラル史観というのは非常に示唆的で、時に光を求めて、その上でいかにその時に努力しているか、そういうエートスが、時代と宗教と民族を超えて、一人一人がそのことをどう思っているかということになるのだと思います。

私どもは農業に携わっていますが、やはり土と離れるたびに人間は非常に高慢になると痛感します。高慢になるということはどういうことかということ、命をいただいて私たちの命があるという当たり前のことですね。そのことは、宮沢賢治が、「世界が幸せにならないうちは個人の幸福はありえない」と『春と修羅』の中で言いましたが、人だけではなくて、人、虫、植物、動物、全ての命が平和の中にあり、それに対して感謝の気持ちを持つことが土とつながることだということだと思っています。

一つ、大きなことを言います。都会に住んでいると、土のことを忘れてしまいます。頭

で考えると、心を忘れます。心は「ハート (heart)」と言います。“heart” の h を最後に持ってくると “earth” になります。その心を忘れてはいけません。

○千葉 西田さん、ありがとうございました。

長時間にわたり、ご静聴、そしてご発言、コメント、ご質問、本当にありがとうございました。最後に、講演者の3人の方々に拍手で。今日は、ありがとうございました。

(終了)